



Vol.152

2015年08月17日 発行

発行人岡本和久

I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社【ホームページ】

〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-8-6広尾186ビル7階

TEL : 03-5789-9821 FAX : 03-5789-9822

お問い合わせ : [メールフォーム](mailto:mail@i-owa.com)

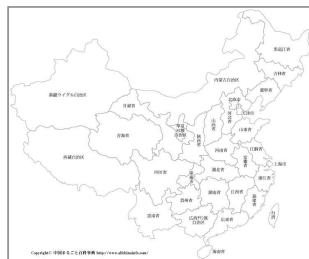
今月の ひとこと

中国の抱える問題が世界の市場を揺るがしています。今月は中国、インドなどの事情に詳しい勝池和夫さんとの対談をトップ記事としました。中国は多様性の大きい国である、すごく良いところもすごく遅れているところもある。片方を見るのではなく両面を見る必要があるという勝池さんのアドバイスは貴重です。10数億の人々が存在していて、その人たちの生活がここ数年で少しずつ改善を始めている。その歯車は止めることができない。需要が増大し、必要とする財やサービスを企業が提供し、企業価値を高めてゆく。これはさらに言えば中国だけでなく世界全体についても言えることでしょう。グローバルかつ長期的視野で人生を通じての資産運用を考えれば答えは自ずからでできます。

FACEBOOK上でクラブ・インベストライフの仲間が活発な議論をしています。FACEBOOKに登録している方、ぜひ、ご参加ください（2015年8月13日現在で参加者数は3088名です）

チャイナ・ナウ、そして日本、アジアの未来は

対談：勝池 和夫氏、岡本 和久 レポーター：佐藤 安彦



ギリシャの問題に続いて中国の問題が急浮上しています。今日は中国やインドを実地に調査して長い間、アジア諸国の株式市場とかかわっておられる勝池和夫さんに長期的な立場から中国をどう考えたらよいのかを伺いました。

クラブ・インベストライフとは？

人生を通じての長期投資は孤独な長旅です。この長旅に耐え、大きな喜びを得るには、資産運用を行うための基礎となる知識と孤独な旅を支えあう仲間が必要です。「将来の自分はいまの自分が支える」ほかない時代、クラブ・インベストライフの活動は、豊かで幸せな人生のための投資を目指しています。

毎月、ネット上で会報誌を公開するほか、FACEBOOKやTwitter上で議論の場を提供し、各地でのセミナーを開催しています。

まったく投資の経験のない方も多数、参加しておられます。大手金融機関から完全に独立しているので、特定の商品をお勧めすることも販売することも一切ありません。

<FACEBOOK、TWITTERへの 投稿の際のお願い>

1. 個別商品の販売・推奨、あるいはそれに類する投稿はご遠慮ください
2. 発言はあくまで個人としてのものとしてください
3. 企業広告はご遠慮ください

I-OWAマンスリー・セミナー講演より テラ・ルネッサンスの活動について

講演：鬼丸 昌也氏（認定NPO法人テラ・ルネッサンス理事・創設者） レポーター：赤堀 薫里



大学4年の時に一人で設立した認定NPO法人テラ・ルネッサンスは、現在、日本人の職員は12名、海外の拠点は4か所、職員は総勢40名となりました。「全ての生命が安心して生活できる社会」ができることを我々は世界平和だと考えており、そのような社会を実現することが、私達の目的になります。これからお話するのは、アフリカの3つの国で取り組んでいる、元子ども兵の職業訓練の実施についてです。

I-Oウェルス・アドバイザーズの メール・マガジン

メルマガへのご登録は下記のメールアドレス宛に、空メールを送信下さい。購読は無料です。

mag@i-owa.com

毎月15日配信 無料

Facebook

Facebook上のグループ、クラブインベストライフ
<http://www.facebook.com/groups/investlife/>

Facebookへの登録が必要で
す。リクエストボタンを押して
入会申し込みをしてください。

Facebookへはこちらをクリック
2

Twitter上のグループ
クラブインベストライフ
http://twitter.com/c_investlife

Twitterへの登録が必要です

 @c_investlifeさんをフォロー

I-OWAマンスリー・セミナー座談会より 良い社会を創る個々人の意識

対談：鬼丸 昌也氏、参加者のみなさま、岡本 和久 レポーター：赤堀 薫里



講演を通じて、月1000円のファンクラブ会員になっていただいたり、寄付をして下さる人がいらっしゃいますが、そこには一つ一つの物語があります。顕著な例として、ある時、京都の事務所に桜の印が押してある手紙が届きました。開けてみたら、刑務所からのお手紙でした。

中国がわかるシリーズ28 海の中国とウイグル、トウプトの興亡（中）

ライフネット生命保険株式会社 代表取締役会長兼CEO、出口 治明氏

日本で新しい都（平安京）に遷都したころ、805年に即位した唐の第11代、憲宗（～820）は、中興の祖と謳われた名君で、宰相、杜佑（制度史「通典」の著者）などを用いて、禁軍（皇帝直轄軍）を強化し、河朔3鎮を除く節度使をほぼ押さえ込みました。

インベストライフ応援団のブログ

あいうえお順、敬称略

紹介一覧はこちら

伊藤宏一の「近現代日本と貯蓄」ー貯蓄は美德なのかー

伊藤 宏一

実践コーポレートガバナンス研究会・ブログ

門多 丈

会長 澤上篤人のレポート

澤上 篤人

真マネー原理

滝沢 伯文

一日一言ブログ

竹田 和平

積立王子のブログ

中野 晴啓

SRIのすすめ 未来の測り方

速水 禎

馬淵治好の凸凹珍道中

馬淵 治好

右脳インタビュー

片岡 秀太郎

鎌田泰幸のブログ

鎌田 泰幸

世代を超える想いの滴

渋谷 健

About Money, Today

竹川 美奈子

出口治明の提言：日本の優先順位

出口 治明

CFA流「さんない」投資塾

日本CFA協会

毎週3分で、資産運用の成功へ導くメルマガ！

尾藤 峰男

森本紀行はこう見る

森本 紀行

バックナンバー

一覧

- [2015年07月15日発行 Vol.151](#)
- [2015年06月15日発行 Vol.150](#)
- [2015年05月15日発行 Vol.149](#)
- [2015年04月15日発行 Vol.148](#)
- [2015年03月16日発行 Vol.147](#)
- [2015年02月16日発行 Vol.146](#)
- [2015年01月13日発行 Vol.145](#)

バックナンバー

2012年12月までに発行されたインベストライフをご購入いただけます。



購入・詳細

参考データ・コーナー

基本ポートフォリオのパフォーマンス

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

7月は4資産型も2資産型も積極型は2%を超えるパフォーマンスでした。

[読んでみる](#)

投信データ・ウォッチ

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

今月は国内外の主要ETFのパフォーマンスをまとめていただきました。

[読んでみる](#)

I-OWAたより

I-OWAマンスリー・セミナー講演より バリュースコア平均法～フォローアップ

講演：岡本 和久 レポーター：赤堀 薫里



2014年5月に『自分でやさしく殖やせる確定拠出年金最良の運用術』という本を出版させていただきました。この本の中で、バリュースコア平均法について初めて紹介したのですが、おかげさまで多くの方に興味を持っていただくことができました。実際に試しているブローカーさんもいらっしゃいます。このマンスリー・セミナーでも昨年6月にバリュースコア平均法の話をしたのですが、今日は追加検証をしたことについてお話をします。

インベストライフ・アーカイブより 「生き延びる力 ～ 戦中・戦後の体験談を聞く

編集 岡本 和久

8月15日は終戦記念日です。1945年8月15日、玉音放送によって戦争が終わりました。戦中、戦後の体験をされた方々もだんだん減ってきています。しかし、極限状態を体験された人々の強いこと。多少のことでは動じない「生き延びる力」を感じます。平和が長く続き、安楽な生活に多くの人が慣れ親しんでいます。それはとてもありがたいことです。しかし、また、何か大切なものをわれわれは失いつつあるのかもしれない。その意味で、今、戦争体験を文章の形にして皆さまにお伝えすることは意味があるのではないかと思います。2012年8月、9月の二か月にわたり公開された記事を掲載します。

[読んでみる](#)

岡本和久のI-OWA日記

★8月8日、札幌で講演をさせていただきました ★なぜ、短期の投資は難しいのか ★仙台で二本立て講演 ★中学2年生から出張授業の感想文がきました！ ★7月26日、大人と子供のためのハッピー・マネー教室を開催しました ★第118回 I-OWAマンスリー・セミナーが開催されました ★資産運用「気づきのタネ」137回 「バブル？」 ★新著「お金・仕事・投資・生き方の授業」のご案内

[詳細はこちらをご覧ください。](#)

セミナー案内

★8/22（土）16：00～18：00 会津若松 主催：会津FPクラブ、I-OWA／インベストライフ・セミナー 「人生を通じての資産運用、基礎と実践法 ～しあわせ持ちへのロードマップ～（仮題）」（講師：岡本 和久）、場所：じぞう家（コミュニティスペース）福島県会津若松市栄町1-25、参加費：一般500円、会津FPクラブメンバーは無料、定員：20名、お申込み先：申込み先 メール info@shiho-fp.com 携帯 090-4885-1696（事務局 しほ）申込みの際には、氏名・電話番号・メールアドレスを記載ください。＊講座開催後、交流会18：30～（2時間程度）を開催します。一般の方も実費（4,000円予定）で参加可能です。講座参加申込みの際に、交流会申込みの方は、一緒に申込みください。★9/5（土）15：00～17：00 沼津 サロンFUJIYAMA主催、I-OWA／インベストライフ・セミナー 「人生を通じての資産運用、基礎と実践法 ～しあわせ持ちへのロードマップ～」（講師：岡本 和久）、場所：東部地域イノベーションセンター、〒410-0801 静岡県沼津市大手町1-1-3 沼津商連会館5F、参加費：1000円、お申込み先：株式会社吉野エージェンシー 担当 山崎様 (yamazaki@yoshinoag.co.jp) ★9/20（日） 12：30～16：30東京都渋谷区 I-OWAマンスリー・セミナー 会場：東京都渋谷区広尾1-8-6-7F（当社オフィス） プログラム：「名著ヨミトキ、アダム・スミスの『道徳感情論』」（岡本 和久）、「心に響く良い文章の書き方（仮題）」（原 英俊氏、）、フリーディスカッション&懇談会、スポンサー受講料：動画での受講は5000円＋税、教室での受講は10000円＋税 ★9/27（日）9：30～13：00名古屋 O & O Together in 名古屋 岡本 和久、大江 英樹、ふたりの“O”が一緒になった最強のコラボセミナー、「考えよう！確定拠出年金の利用法」（講師：大江 英樹、岡本 和久）会場：ウイंक愛知（愛知県産業労働センター） 13階 1310会議室（名古屋市中村区名駅4丁目4-38）参加費 1,000円（税込）、定員 30人（先着順）懇親会 12:00-13:00：懇親会費 1,300円前後（税込）、懇親会定員30人（先着順）主催：I-Oウェルス・アドバイザーズ株式会社、株式会社 オフィス・リパレタス お申込みはこくちーずで。 http://kokucheese.com/event/index/320996/ ★9/27（日）14：00～16：00 尾張一宮 大人が学ぶ「子供のためのハッピー・マネー教室」（講師：岡本 和久）会場：尾張一宮駅前ビル（一宮市栄3-1-2）6F小会議室 定員：30名、参加費：大人；2,000円（テキスト代込）、学割；1,500円、子供；100円（大人料金にはテキスト代として岡本和久の新著「しあわせ持ちになれる『お金、仕事、投資、生き方』の授業」【1680円】が含まれます）、【セミナーに関するお問合せ先】事務局：杉本優子 ★10/3 午後（時間の詳細は未定）秋田 「しあわせ持ちになれる『お金、仕事、投資、生き方』の授業」（講師：岡本 和久）秋田県ゆとり生活創造センター 遊学舎 あきた中央市民活動サポートセンター 〒010-1403 秋田市上北手荒巻字堺切24-2

[詳細はこちらをご覧ください。](#)

Page Top

バックナンバー | お問い合わせ | ご感想 |

Copyright © I-O Wealth Advisors, Inc. All rights reserved.



チャイナ・ナウ、そして日本、アジアの未来は

対談: 勝池 和夫氏、岡本 和久

レポーター: 佐藤 安彦

勝池 和夫氏: 1978 年青山学院大学卒業後、新日本証券に入社。1982 年南カリフォルニア大学経営大学院へ留学。MBA 取得後、国際調査室、シドニー事務所などで海外市場の調査に携わる。1994 年から太陽投信の香港拠点で中国株投信の運用を開始、業界 No.1 の実績を残す。その後、AIG 投信投資顧問を経て、2003 年にコンサルティング・アジア社を設立。中国、インドなどアジア市場を調査、講演なども行う。

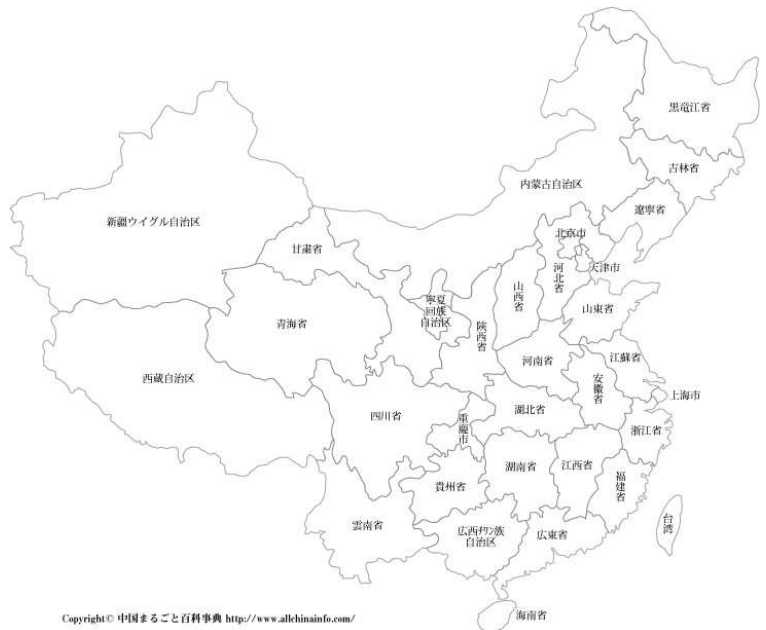
岡本: ギリシャの問題に続いて中国の問題が急浮上しています。今日は中国やインドを実地に調査して長い間、アジア諸国の株式市場とかかわっておられる勝池和夫さんに長期的な立場から中国をどう考えたらよいのかを伺いたいと思っています。勝池さん、よろしくお願いします。

勝池: 最初に申し上げたいのは、最近の上海株の暴落は、ネガティブな面ばかりでなく、ひょっとしたら日本にとってのチャンスになるかもしれないということです。経済が減速している最中に株価に下落圧力がかかっている中国にとって、日中関係の改善は一つの国策でしょう。7% 成長を大きく割り込まないため、そして産業構造の高度化には日本からの投資や協力は不可欠と言っても良い。だから二階さんにも会ったし、安倍さんとも会うと言っている。その安倍さんの 70 年談話の内容にもよりますし、アメリカを睨んだ政治的な意図もあるでしょうが、日中関係が改善した場合、日本へのインバウンド経済効果は絶大になると予想されます。2015 年の上半期だけで 218 万人(昨年の上半期は 100 万人)が中国から来て、かなりの金額を使う。帰国してもインターネットで日本製品を買う。個別銘柄などはあまり話題にならないのですが、化粧品や電気炊飯器を取り扱っている会社の株価がここ 2 年余りで数倍に上昇している。また、今まではディフェンシブで余り魅力が無いと思われてきた食品企業の製品に対して、中国を含めて近隣で 40 億人のお腹がグーと鳴り、購買意欲が盛り上がっている。このインバウンドの国内消費とアウトバウンドの製品輸出の急増は今まで未経験でしたので、その将来性を真剣に考慮する人はあまりいませんが、日本経済にとって、地方経済の活性化にとって大変重要だと思います。



長期投資仲間通信「インベストラيف」

岡本: マクロ的に見たときに、今の混乱はマーケットと共産党体制の争いなのだろうと思います。しかし、歴史的に見ても公権力が持続的に、長期的にマーケットに勝てるはずもなく、その軟着陸がどうなるのか。また、株価の動きについても、政府が介入して色々やっているが、その辺りも目先のには気になっています。



勝池: 中国経済の成長率は 7%まで落ちたけれど、改革開放の 1978 年からの 35 年間、年平均で 9.8%の成長をしてきた国なんて過去にどこにもないのです。確かに今は、輸出も消費も良くない。良いのはインフラ投資と大都市の不動産だけという状況です。それを見て失速したという人もいますが、IMF が発表している世界経済見通しでは、今年、来年の世界全体の成長率が 3 パーセント超だとされている。アメリカは好調だと言われているが 2~3%で、ユーロ圏は 1~2%、日本は 0~1%、BRICs と騒がれていたけどブラジルやロシアは今年マイナス成長見通しとなり、これからはインドと中国、つまり ICs になったと言われるくらい新興国の中でも実力に差が出ている。よく、中国の数字は信用できない。電力消費や鉄道貨物などの指標から判断したら、中国経済はほとんど成長なんかしていないのが実情だと言う人がいます。私も中国の数字を余り信用していませんが、本当に成長していないのだったら、あの様な日本での「爆買い」は起きないと思います。中国経済が減速し日本の機械メーカーの業績が下がっている。一方で食品や化粧品など日常的な消費財のメーカーの業績は大幅に向上している。同じ国からの需要でこんな違いが起きているのです。どこを切り取るかで全然違う。35 年間高速成長を続けてきた後で、経済が中高速にギアチェンジすることはむしろ当たり前のことだと思うのです。

岡本: それはその通りですね。

勝池: では、なぜいま失速したと騒がれるのか。図書館で中国経済の本を探すと、「崩壊だ!」「クラッシュだ!」とかのネガティブな題名が付いた本が 10 年以上前から並んでいます。今の書店でも「壊滅!」や「大減速!」が目立ちます。長い間、的外れの見通しをしてきた方々は中国株が下がったり、不良債権などが増えたりすると、「それ、見ろ!」と鬼の首を取ったように騒ぎだします。中国経済の見通しが良好などと今更言えません。他にもゴーストタウンの例



長期投資仲間通信「インベストラيف」

として、何回も内モンゴルのオルドス市のニュータウンの話がテレビで取り上げられるけど、あれは開発の失敗で人が住まないまま放置された町です。本当の意味のゴーストタウンは、何かの事情で人が退去して建物や廃墟だけが残った町だから、テレビの取材した町は厳密にはゴーストタウンではない。それを言ったら、日本の消滅可能性都市の方が怖いのではないかな。今住んでいる市町村が無くなってしまう訳ですから。それに、中国にはゴーストタウン(?)だけではなく、銀座みたいなのところも沢山ある。昨年、成都に行ってきたがかなり良い。内陸の成都、西安、重慶、昆明の4都市を結んだ経済圏は、菱形(ダイヤモンド)経済圏と呼ばれているようです。上海が悪くても成都が良いとか、反日が100万人いれば親日が1000万人いる可能性もあって、広いが故に色々と差が出るのが中国の特徴だと思います。見るところによって、何とでも言えてしまう。機械メーカーが見る中国と消費財メーカーが見る中国では全く違って見えるのが中国だと思う。悲観的に見ても、世界全体の成長率と比較すれば、高い成長率を維持しているのが中国の実態です。

岡本:確かに多面性、多様性の大きい国ですからね、どこを見るかによって印象は変わる。

勝池:また、今回の株価の騒動について、「大暴落だ!」「個人が売買の8割で投機的だ!」「株の取引を止めるなどの官制相場は世界で通用しない!」などと批判されているけれど、これも比べてみないといけな。上海総合指数は今3,600ポイントぐらいです。確かに5,000を超えた6月のピークからは3割程度下げている。でも私が中国株運用を始めた20年前は500~600ポイントだったので、それから直近の暴落(?)も含めても約6倍になっている。同じ20年間にアメリカのS&P500は約4倍、日本のTOPIXはほとんど横バイなので、どの時点と比べるかで印象は全く違ってしまう。この一年間で見ても、40キロの体重の人が過食、爆食したせいで一年間に2.5倍の100キロに太ってしまった。これは危険なので食事制限したら今度は拒食症に陥ってしまい、体重が30%減り今では70キロになってしまったようなイメージです。それでも、その70キロはBMIで見るとそこそこ適正に近い。

岡本:よくわかりますね。

勝池:次に中国の個人投資家の投機性についてですが、いま、中国に銀行ができて36年、証券会社ができて30年、株式市場ができて25年。では日本の株式市場が戦後、1949年に再開されて25年経った昭和49年(1974年)にどうなっていたかを見ると、売買の6割が個人、2割が更に投機的な証券会社のディーラーでした。今の上海とあまり変わりがなかった。その頃はオイルショックもあったため、市場の気持ちは資源関連株、更に産金株、そして夢を囃したガン関連株などでした。また一方では仕手集団が暗躍して株式市場は博打場に近しい様相でした。要するに個人投資家の投資尺度に「ファンダメンタルズ」などという概念はほとんどありませんでした。株式市場が投資の対象らしくなってきたのは、国際優良株相場が始まった1980年代前半からです。アメリカだって1800年代後半から1920年頃までは、国債から鉄



長期投資仲間通信「インベストラيف」

道株、工業株への投機の歴史でした。ベンジャミン・グレアムの「賢明なる投資家」が発売されたのは1949年のことで、その元になった「証券分析」の発刊は1934年だった。それまでの株式市場には投機に命を懸けた「懸命なる投機家」が多かったのではないか。これらの事を全く無視して、最近の中国市場で起きている事をただ批判ばかりするのはどうかと思うのです。証券市場の発展はどここの国も投機が先導したと言えなくもない。中国市場は勿論未熟です。でも成熟していると思っていた日本の市場でも東芝のような信じられない不祥事が発生する。株価が下がらないように取引を止めてしまったのは、4年前に温州で事故を起こした高速鉄道車両を埋めてしまった時のように呆れてしまいます。でもそれで世界の批判を浴びることは、長い目で中国の経済、社会を正常化に向かわせると期待しています。今は経験がないので、仕方がない面もあると思える。そもそも中国の証券市場は、国有企業の改革、資金調達ためにできた市場で、投資家の資産形成や民間企業の資金調達の便宜のために開かれたのではない。つまり元々、官製相場なので、いまに始まった事では無い。だから私は中国株投信を運用し始めた当初、特に中国の本土株については余り期待していませんでした。練習のように上場してきた国有企業に継続企業のイメージが湧かなかった。また当時、私が見える中国の本土企業の株といえば、H株とB株とレッドチップだったので、HとBと赤ではまるで鉛筆の芯みたいなので(笑)折れやすく危なくてとても買えない印象でした。でも。それがようやくボールペンのように、しっかりとした投資対象になってきているのも事実です。

岡本: 中国で証券取引が始まって25年。どんな市場でも最初は公的なニーズを反映する側面があります。また、個人の富裕層がバクチ場として市場を考える傾向もあります。アメリカでいうと「咆哮の20年代」と言われた頃の話で、とあるランチパーティーに投資家が集まっていた。そのうちの一人の大物投資家が、胸ポケットからハンカチを出した時に、一緒にポケットに入っていた紙切れが床に落ちた。その人がそれに気がつかずにその場を去ったあと、みんながその紙切れを覗き込むと「〇〇〇(銘柄名)を買うこと」と書かれていて、みんな大喜びでその株を買ったけど、その株を売っていたのは紙切れを落とした大物投資家だった。つまり、彼はわざとニセの紙切れをハンカチに仕込んでおいたのですね。そんな話があるようなマーケットだった。

勝池: まさに、今の中国の投資家に似ていますね。彼らはあまり自分の判断で投資行動をしない。儲けている他人に乗っかる、マネをするのが特徴です(笑)。

岡本: 明治時代、1878年に証券市場で、最初に主に取引されていたのは俸禄国債だった。明治維新から10年しか経っていない時です。当時、50万人の武士層が幕府の消滅で全員失業したために、国が債券を発行して、この金利で食べていきなさいと指示した。しかし、金利だけでは生きていけず債券そのものを売却し始めた。一応、禁止されていたけれど背に腹は代えられないという状態だったのです。初めは相対売買で売却していたのですが、買い手は財閥で、旧武士層はダンピングで売り叩かれていた。これを適正な価格にしないではいけな



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

いというので取引所が設立された。その後、鉄道株がブームになったけれど、最初は国の都合で市場が始まったのはどこでも一緒です。だから、中国の市場に対して現在の先進国の物差しを当てて、これがおかしいと言ってみてもほとんど意味がないのかも知れませんね。

勝池: 私はなんでも食べ物に例えるのです(笑)。中国経済を中華料理に例えて説明すると、その発展の歴史は 78 年の改革開放を受けて、80 年代に深圳、珠海などの広東省に設立された経済特区から始まっています。つまり広東料理がスターターです。次の 90 年代にはドラゴンヘッド戦略(上海を龍の頭に譬えた)で上海料理が加わった。浦東新区が中心でした。更に 2000 年代になると、中国経済の勢いは北京・天津などの京津冀(けいしんき)経済区に北上した。北京料理に広がった訳です。そして、直近の 2010 年代は、残された四大料理の一つである四川料理がテーブルに並び、成都や重慶などの内陸部がホットになりました。このように例えると解りやすいのではないのでしょうか。つまり、フカヒレスープに始まり、上海小籠包、北京ダック、マーボー豆腐へと広がって行きました。では、これからはどうなるかと言うと、私は日本料理、タイ料理、ベトナム料理、インド料理などとのコラボレーションが進んで、ヌーベルシノワ(新中華料理)に展開していくと予想しています。そして、料理は更に美味しく、バリエーション豊かで、安全で、料理店のサービスも向上していくのではないのでしょうか。中国政府の「一帯一路」構想と、そのための AIIB の設立はこのヌーベルシノワの方向を大きく前進させる可能性があります。中国の経済は長く、外資に国内を開放して成長してきた。しかしこれからは内資を国外に展開していく成長の形が「新常态」の一つとなるように思えます。

岡本: お腹が減ってきた(笑)。

勝池: また、中国はある意味で規制が緩いので、日本では規制の多いドローンやタクシー配車アプリなどを作る企業がどんどん増えている。深圳の創業板は、2009 年から始まった中国版ナスダック市場の様なところですが、今までの沿海部の大型国有の非効率な製造業だらけという中国市場のイメージを、内陸部には中小型の起業家



精神溢れた私企業もあるのだという、新しいイメージに変えました。そして、その指数は上海総合指数が急騰する前からかなり上昇していた。個人投資家の間には、「株は儲かる」というイメージが膨らみ、その勢いがついに昨年の 11 月頃から上海市場に伝わっていった。折しも、金融緩和があり、また香港から上海市場が買えるようになるとか、中国の A 株が MSCI に入るとかの憶測があり、そして年が替って 4 月には新聞で「まだバブルでは無い」と報道があったので一気に信用買いに火が付きました。信用取引といえば、中国には 2 つの仕組み



長期投資仲間通信「インベストラيف」

があつて、融資という2倍程度の信用取引と、配資という5~10倍のレバレッジが効く仕組みがあります。後から参入した個人投資家は配資を主に使つたらしく、やられた人が多かったので騒ぎになっている。だけど、中国の家計の資産構成では、6割が不動産で、株の割合1割以下のはずで、今回の株価の下落はメディアが騒ぐほど中国経済や、日本での爆買いに大きな影響を与える程の問題では無い。ただし、不動産が大きく下がりだしたら大変な事になるでしょうね。

岡本:長い目で見たときに中国の社会体制は少しずつ変わっていきますか?

勝池:大きな人口を抱えた国という事で比較すると、中国は一党独裁で、インドは世界最大の民主主義国家。体制は全く違いますが、経済成長率で比べると現在約7%でどっちもどっちではないでしょうか。インドの場合、物事が決まるのが大変遅い。2014年の5月にモディ首相が出てきてようやく物事が進み始めているけれど、現在もモンスーン国会で大変重要な物品サービス税の導入や土地収用法の改正などを巡り、インド人民党と国民会議派が大いに揉めている。インドはひと言で言うと「バラバラな国」だ。カーストで縦にバラバラ、交通インフラが十分に機能せず横でもバラバラ。でもようやくバラバラ感が薄くなり本来の大きな可能性が開花していく段階に入りそうだ。近い将来成長率でも中国を上回るでしょう。モディさんに期待したいところです。一方、習近平主席の中国も変わり始めている。私は、アメリカに留学している中国人とインド人学生の動向に興味を持っている。20年くらい前の中国人留学生は、アメリカの自由や民主主義、法の支配だとかの価値観を信奉していたけれど、今はアメリカのシステムは自分達の政治・経済体制には合わない、自分たちの価値観に自信を持ち始めている。アメリカで学んでいるインド人留学生の多くも、将来的にアメリカの経済は世界に後れを取る考えており、アメリカが世界をリードすると信じている日本人の大半とは全く違う意見を持っている様だ。人の動きを見てもインドは今まで長く「頭脳流失」の源だったが、現在は「逆頭脳流失(reverse brain drain)」が起こっているらしい。2003年、IBMの世界の従業員のうち3%の9,000人がインドに居たが、今ではその数は150,000人で30%以上を占めているらしい。こんな事を見ていると、中国やインドよりもアメリカの方が心配になってしまう。アメリカの経済発展に交通インフラや情報インフラの整備、更にシリコンバレーでのベンチャー企業の飛躍に多大な貢献をしてきた中国人、インド人が今は自国の経済により大きな可能性を感じているようだ。

岡本:つまり、経済や社会のダイナミズムの前では、政治体制はそれほど大きな力を持っていないということですね。

勝池:訪日する若い中国人達は、日本の料理を食べて日本のサービスに触れると、段々と解ってきている。トヨタの車を買っても日本の事を好きにはならないかもしれないけど、日本に來れば日本への理解が深まるんですね。観光は「平和維持産業」だと星野リゾートの代表は言っ



長期投資仲間通信「インベストラيف」

ていたけど、その通りですね。

岡本: 確かに中国の方も段々慣れて来ていますね。少し前は電車の中でも、中国語の大声が聞こえていたけど、最近はヒソヒソと話すようになっていっていると感じる。街を歩くにしても、トイレにしても、マナーを守る意識が高くなって来ていますよ。まさに学びの過程にありますね。

勝池: 昨年の9月、習近平主席はインドのモディ首相の64歳の誕生日に合わせてインドを訪れて、モディ首相が生まれたグジャラート州のヴァドナガルに立ち寄っている。その後、今度は今年の5月モディ首相が訪中した時、習主席の生まれ故郷の陝西省の西安(昔の長安)を最初に訪れている。今まで中国の経済発展は臨海部が中心だった。地図で見ると揚子江の北と南で形は「T」だった。これからは内陸部を結ぶ高速鉄道も次々完成して発展の形が揚子江で横に繋がれた「H」になっていく。習近平が西安近くの生まれであることは面白い、「陸のシルクロード」計画の起点は西安になりそうだ。ノーベル賞経済学者のスティグリッツが、21世紀の世界経済に最大の影響を与える要素として「アメリカの技術革新」と「中国の都市化」の2点を挙げている。中国の都市化比率は2011年に50%を超え、昨年末には54.7%に上がった。ほかの国で都市化率が50%を超えたのがいつだったかという、国に寄って都市の定義はまちまちだが、イギリスでは1850年代、アメリカでは1920年代、日本は1950年代だ。日本の経済はそこから70%までの都市化比率の上昇を原動力に成長率は二桁に達した。色々な国の経済発展を見ていると、都市化比率50%は発展の入り口だった様だ。実は中国の場合、戸籍ベースの都市化比率は40%以下なので、都市化の経済浮揚効果はまだまだ大きい。ちなみに、インドはそれよりも低い30%台である。

岡本: 1950年というと朝鮮戦争が勃発して日本がようやく本格的復興に踏み出したころです。美空ひばりの東京キッドがヒットし、手塚治虫の「ジャングル大帝」の連載が始まった頃です。現在の中国の都市化率があの頃の日本と同じというのは興味深いですね。

勝池: 中国の内陸の都市を通して、ヨーロッパ、ミャンマーやベトナムともつながって行く。インドと中国との関係でいえば、モディ首相の5月の訪中の時、本来は同じ時期に訪日予定だったマハラシュトラ州のファドナビス州首相が訪日をキャンセルしてモディ首相に同行して中国に行ってしまった。それほど、インドと中国の協力関係が進んでいる。中国の山東省の企業がインドのグジャラート州に火力発電所を建設する。インドのIT技術を中心とした世界最大の職業訓練会社が、茅台酒しかない様な貧しい貴州省に5万人の中国人が学ぶための施設を作ると言っている。中国は貴州省の省都の貴陽を国家のビッグデータ産業の中心に育てたいらしい。上海で行われたその施設建設の調印式にはモディ首相が出席している。私は、このナレンドラ・モディ首相と習近平主席がリードするインドと中国の関係をとても注目しています。インドが早急に整備したい鉄道などの交通インフラには中国が協力する。反対に中国経済の技術革新のための情報インフラ構築にはインドが協力する。やはり、これからはアジアの時



長期投資仲間通信「インベストラيف」

代ですね。

岡本：中国とインドが強みを持ち寄って協力できるところは協力する体制になっている。ラーメンの中国とカレーのインドが一緒になって、いよいよカレー・ラーメンの時代がやってきますね（笑）。

勝池：はい、広く全体的にアジアを面で「観」ないで、減速だ、上海暴落だと表面的もしくは点で「見」ても、一喜一憂するだけです。色々な事と比べないのはバランスを欠いています。中国にもインドにも、もちろん問題は山積みにあります。でも問題のない国なんて見当たりません。頭
の天辺から足の裏まで全て健康な経済はありません。

岡本：自分の国では普通のことを海外でも当然のこととってしてしまう。しかし、それが現地の人から見ると眉をひそめるようなことはよくあります。日本だってそうだった。確か 1970 代に海外に行った時に、日本の団体ツアーと同じ飛行機になった事がありました。そこで驚いたのが、飛行機が水平飛行になった途端に、その集団がみんなズボン脱いでステテコ姿になっちゃった。彼らとしたらリラックスできる格好なんだろうけど、周りの外国人はビックリしますよ。日本も振り返ればそんな時代があったのです。中国人のマナーは今は確かに色々問題もあるかも知れないけれど、それは、中国にとっての成長段階でのことなんです。

勝池：中国に話を聞きに行くと、逆に日本経済はどうなんだと聞かれることも多い。そこで彼らには、「日本経済の最大の問題は人口減少である。その解決のためには人口を増やすしかないが、それは無理なので、「人数」を増やすしかない。人数とは訪日外国人の人数と、海外に住んでいる日本ファンの人数だ」と言っている。現実にその人数が今急増している。

岡本：日本で質の高い商品を買えば、次からはネットで日本から買い物をしてくれる。ある意味、日本の国土が広がっているのと同じ事ですね。

勝池：そうです。来てくれれば地方は活性化するし日本を好きになる。これから中国は交通インフラ、インドは情報インフラを創っていく。これ対して、日本は「味覚インフラ」で対抗していけばいい。味覚インフラとは例えば水、食材、だし、調理法、発酵技術、厨房機材、食品安全、鮮度保持技術などです。日本はこれらで世界ダントツですね。マレーシア人は、かつてウニやイクラなどの海鮮食品を食べなかったけれど、今では現地の業者から2~3年前の10キロ、20キロ単位ではなく1トン、2トン単位で日本の業者に注文が入っている。日本に観光で行って味をしめたらしい。ロンドンでは300年の歴史がある王室御用達のワイン商が数年前からは日本酒を扱っている。現地のワイン&スピリッツの学校では日本酒の授業がある。有名シェフは日本の麹菌と良質の抹茶を探している。ソーセージばかり食べていると思っていたドイツ



長期投資仲間通信「インベストラيف」

ツ人の間で日本ののりで巻くおにぎりが人気になっている。パリではマクドナルドより回転寿司の店舗の数が多い。こんな時代になっているんです。私は「アベノミクス」よりこの様な「アジ(味)ノミクス」が中長期的に日本経済を大きく変えると思っています。重要なのは日本政府の政策より世界の消費者の需要です。

岡本: インドにしても中国にしても、あれだけの大きな人口を抱えていて、彼らの生活が少しずつ良くなっている。いったん、それを体験してしまうと、もう逆転はできないですね。そこに大きなニーズが生まれるのは間違いないですね。このように大局的視点は投資でとても重要だと思います。

勝池: 人生では、事故に遭うとか、健康を害するとか、仕事に失敗するとか、色んな局面でリスクに遭遇します。その時に助けてくれるのが、資産運用から生まれたリターンかも知れない。困ったときに救ってくれるのが、いつか、ずっと前に行った長期投資かも知れない。私は最近「お守り」の話をしています。ほとんどの人が持っているお守りは大別して2種類です。「厄除け」と「開運」です。厄除けはリスクの軽減を願い、開運はリターンの拡大を願います。これを金融商品に例えると、厄除けは保険で、開運は投資信託という事になります。あまり投資を開運に結びつける人はいません。不運に終わることももちろんあります。しかしながら、厄除けのご利益が無く何かの損失が出た時に、それを埋め合わせる可能性があるのが、開運から得られた利益なのかも知れません。ですので、お守りはやはりセットになっています。それと、投資に関して、よく「卵を全部一つのカゴに盛るな」と分散投資を奨めています。この話は面白くない。では一体いくつに分散すれば良いのでしょうか。私はその一つの答えを実際に行った中国株運用から閃きました。それが13の法則です。

岡本: 72の法則ではなくて13の法則?

勝池: 香港で中国株を運用していた頃、仲間と麻雀をやっていたらふと気が付いた。麻雀の牌の種類は5種類で中国株の種類と同じ。それらを13牌横に並べて戦う。情報は他の3人が場に出した捨牌である。そこで、13銘柄の中国株ポートフォリオで実際に運用したら、成績が格段に良くなった。縦に40~50銘柄序列を作ったポートフォリオは判断が緩慢になる、麻雀のように13銘柄横に並べてみると投資判断が速く真剣になる。ポートフォリオに無駄がなくなり、大変美しく見えるようになる。きっと13という数は、最適に分散された数だろう。それはゴルフにも当てはまる。ゴルフもバックに入れられるクラブの数は13本プラスパターである。あれが50本入っていたら、迷う。トランプのカードもエースからキングまでの13枚。鄧小平やカルロス・ゴーンのブリッジ好きは有名で、デシジョンメイクに役立つと言われている。この様に、13は投資にも麻雀にもゴルフにも、ひょっとしたら商売にも当てはまる大変有効に分散された数なのですね。この話は中国人にとっても受けた。



長期投資仲間通信「インベストラيف」

岡本:なるほど、面白いですね。バフェットの様な投資家の場合、分散によるリスク削減というよりもバリュー投資によるリスク削減ということをやっていますね。価値が 100 あるものを 70 くらいで買う。そこから少し位下がっても、65くらいで落ち着く。その後うまく行って100に戻ったらかなり儲かるという仕組みです。本当に割安な株を判断できる人はそのような投資も非常に有効だと思います。そこまで自信がなければ幅広く分散ということになる。面白いのは個別で 100 銘柄ももっていたら收拾がつかないけれど、投信で 1 銘柄にして持っていれば判断がしやすい。

勝池:そして大きな時代の流れに合った投資をする。

岡本:私が好きな伝説の投資家ジョン・テンブルトン卿は、1930 年にアメリカ市場で 1ドル以下になっていた 100 銘柄を全部買った。そして、数年のうちにそれが数倍になった。それから 1950 年代にまだ戦後の復興過程だった日本の株を買い始めた。これは、かつて彼が大学を卒業してから行った世界旅行で日本を訪れて、日本人が勤勉な民族だと知っていたから買ったと言われています。当時は外資の規制があったから最初は個人口座で買って、70 年代後半までには大量の日本株を保有して大儲けした。その後、1982 年にアメリカ株を大量に買った。当時、平均が 800ドル位だったけど、90 年 3000ドル位になるだろうと予想して、実際にそれが的中して儲けた。そして、90 年代のアジア通貨危機の後には韓国株ファンドを大量に買っている。香港が返還された時は中国株に投資をした。2000 年になったら大きな混乱に備えて債券を買うようアドバイスをした。こういうのを聞くと、大きな投資判断は人生のうちに数回だけで、数年で売ったり買ったりするのではなく、大局観を持って世界の動静を見ながら投資するのが王道かと思いますね。中国やインドはあれだけ大きな国だから、こせこせとした小さな事ではなく大きな視野で見ないとダメですね。バフェットなどの偉大な投資家は、名声が確立しているから数年間のパフォーマンスが悪くてもみんな文句を言わずに待ってくれる。それと同じことができるのは個人投資家ですよ。個人なら自分が待つ覚悟さえ決めればいいのです。機関投資家はそうはいかないですよ。年金も短期の勝負に追われていますからね。

勝池:私は、先ほども話しましたが、色々な所で食べ物話題を出します。中国は、東を向いたニワトリと言って、鶏肉の部位で説明するか、先ほどの四大料理の話。インドは、国の形がカレー料理についてくる「ナン」に似ている。そのナンがタンドリー窯から離れて、魔法の絨毯のように飛び出す(成長する)イメージです。ASEAN は、人口と GDP の 4 割を占めるインドネシアが東西に 5,000 キロ広がったお皿の様に見えます。そして、その上にタイやベトナムなど他の ASEAN9カ国が盛ってある感覚です。ASEAN には世界の民族の 1/3 が集まっているなんて言われていて、そう考えると、纏まるのが大変です。日本の役割は大きい。その時に大事なものは、これらの国々をフードコート化すること。つまり、ASEAN をトムヤムクン、生春巻き、海南チキンライス、サテなど、色んな料理が楽しめるフードコートに見立てて、中国料理とインド料理という圧倒的な存在感がある2大料理に競合していくしかない。それが今年、発足



長期投資仲間通信「インベストラيف」

予定の ASEAN 経済共同体(AEC)の方向性だと思う。JICA(国際協力機構)の進めている ASEAN の連結性マスタープランの取り組みもまさにこの流れです。また、纏まりにくい ASEAN 諸国で一つ共通なのが皆日本のポップカルチャーが大好きということらしい。マンガ、アニメ、コスプレ。インドネシアでは JKT48 もやっていますね。他の国でも〇〇〇48 が結成されつつある。この「カワイイ」と「おいしい(健康)」そして「心地よい(安心・安全)」の 3 つの感覚をキーワードにした「クール・ジャパン」はまさに日本経済の救世主だと感じます。中国人の「爆買い」の対象も、突き詰めればこの 3 つの感覚を満たしてくれる製品やサービスです。

岡本:確かに食べ物に例えると解りやすいですね。私も、アセット・アロケーションを幕の内弁当を例にして話しています。沢山の種類のおかずを入れるのに、若い時は肉系(ハイリスクである株式)を多く持ってもいいけれど、年取ってきたら野菜物(ローリスクの債券)を増やしたくなりますねって。

勝池:それと中国経済の見通しを説明する時によく使うのが、中国全体が載っている大きな地図です。大抵の場合、皆さんはパワーポイントで 1 ページに 4 つもグラフが載っていたり、細かな字が詰まっていたりする 30 ページ位の資料を使ってプレゼンするけれど、私は大きく地図を広げて話す。中国、インドなどの大きな国は A4 に押し込んで窮屈です。その地図に鉄道路線を示すシールを貼ったり、自分で実際に撮ってきた建設中の上海虹橋交通ターミナルや西安の高速鉄道北駅、広州白雲空港などの写真を貼ったり、具体的に現場感覚で、大きくアジアの発展の可能性を説明します。これからますます繋がっていくアジアはもはや数字だけでは説明できません。地図は中国の他にインドとアジア全体のものを使い分けています。地図にはロマンがありますね。

岡本:これはすごいですね。

勝池:ここは、すでに話した菱形経済圏ですが、これらが高速鉄道でつながる。重慶ー成都間は今年年末までに繋がる予定です。西安ー成都も建設中で完成すれば、現在の 12 時間が 3 時間に短縮される見通しです。隣国パキスタンでは 5.5 兆円を使って、中国パキスタン経済回廊を作る。タイのマレー半島に陸地が細くなっているクラ地狭と呼ばれている地域があって、そこに運河を作ろうとしている。それを手掛ける会社が香港にできたと噂されている。この他にも、ニカラグア運河計画





長期投資仲間通信「インベストラيف」

とかブラジル横断鉄道計画とか、中国が関係する海外でのインフラプロジェクトが沢山ある。なぜこんな事ができるかというと、やはり日本列島の7倍の長さの万里の長城を作った国、北京から杭州までの2,500キロの運河を610年に完成させた国ですから、こういった事を考えるDNAがあるんですね。このように中国はインフラが得意中の得意の「身体を使う国」です。インドはIT産業で世界をリードする「頭を使う国」です。これに対し、日本は「気を遣う」国です。ですから「おもてなし」なんですね。その気を遣って作った日本独自の製品・サービスが世界を魅了し、世界の人々がまさに日本に「来～る・ジャパン」になっている。これは千載一遇のチャンスです。

岡本:クール・ジャパンというのは、グローバルな規模で、世界のさまざまな物に日本の伝統という調味料を加えて売り出すという事なんでしょう。

勝池:日本の持っている可能性は大きいですよ。最近、1/3 セオリーという話もしています。北アメリカには世界の人口の6%、4億数千万人住んでいます。しかし、その6%の人口の体重を全部合わせると世界の体重の1/3になる。北アメリカは重く、健康被害が問題になっている。世界で一人当たり一番ドーナツを食べるのはアメリカ人で、一番ココラを飲むのはメキシコ人です。道理で重いわけです。健康的な和食や低カロリーの日本食品が人気です。世界の二酸化炭素の1/3は中国から出ている。こちら環境悪化による健康被害で日本の空気清浄機やのど飴が良く売れている。世界の貧困層の1/3はインドにいる。日本の製造業の進出加速で雇用が増えることが期待される。下痢で亡くなる乳幼児の比率はとても高い。そこで日本の乳酸菌飲料が役立っている。この様に、世界の経済大国は深刻な問題を抱えている。そして、それらを解決するソリューションの多くを日本が握っているのかも知れない。アメリカの健康、中国の環境、インドの雇用を改善できる製品やスキルだ。さらに日本の企業の強さを五感に分けて考えた。今の日本の最大の強みは「味覚」、それと「触覚」。日本人の味覚が洗練されている理由は、海岸線の長さや森林比率の高さにあります。日本の海岸線の長さ三万キロはアメリカより5割長い、中国の2倍、インド4倍長い。森林比率は、先進国ではフィンランド、スウェーデンの次、国土の約三分の二が森林に覆われている。中国、インドの森林比率はどちらも2割台だ。アメリカは3割台だ。だから、日本には海の幸、山の幸、森の幸が溢れていて、味覚が育っている。水も良く、美味しさが詰まった発酵食品も世界一多い。百年以上前に昆布から「うま味」を発見したのも日本人だ。こんな国どこにも無いです。そして触覚は、洗浄機付きトイレ、化粧品、貼り薬、紙オムツ、哺乳瓶、機能性衣料、筆記具、和包丁、マッサージ機、高級デニムなどに活かされている。豊富な食材に、四季がある風土や箸を使う文化などが日本人の「触覚」を研ぎ澄ませた。日本は戦後長く「視覚」と「聴覚」に関連する産業が経済を引っ張ってきました。オーディオ・ビジュアルですね。でもシャープやソニーの例でも分かるように、もはや視聴覚産業には頼れない。「嗅覚」は、日本人は世界で最も匂いを嗅がない民族なのでその感覚を使った産業には限界がある。やはりこれらは「味覚」と「触覚」に関連した製品・サービスがグローバル化していくだろう。シリコンバレー



長期投資仲間通信「インベストラيف」

のグーグルのキャンパスには日本の緑茶と日本のマーサージ機が至るところに置かれている。日本の味覚(おいしい、健康)と触覚(心地よい、安心・安全)が、彼らのクリエイティビティをサポートしている様だ。そしてその二つの感覚に関連した企業は小さいけれど地方に多く存在することも、日本経済には朗報だ。それらの「ローカル・クール・ジャパン」が地方経済の起爆剤に成り得る。今から100年少し前の日本の主な輸出品は米、茶、生糸だった。昨年和食と富岡製糸場が世界遺産に登録されたことは、この元々あった得意産業の復活の前兆のような気がする。通信インフラと交通インフラの目覚ましい発達とアジアを中心とした中間層の急増は、今まで知らなかった人が日本の事を知るようになり、買えなかった人が日本の物を買えるようになり、今まで行けなかった人が日本を観光できるようになり、そして、今まで届かなかったところに日本の製品が届くようになる。日本の未来は明るい。

岡本: 勝池さんのお話を聞いて明るい気分になってきました。結局、中国もインドも ASEAN 諸国も日本も個別に考えるのではなく、お互いがプラスの相互作用をして全体としてアジア地域の成長が高まるということですね。今日は興味深い話、ありがとうございました。

この対談は2015年7月30日に行われたものです。



I-OWA マンスリー・セミナー講演より テラ・ルネッサンスの活動について

講演： 鬼丸 昌也氏

(認定 NPO 法人テラ・ルネッサンス理事・創設者)

レポーター： 赤堀 薫里

大学 4 年の時に一人で設立した認定 NPO 法人テラ・ルネッサンスは、現在、日本人の職員は 12 名、海外の拠点は 4 か所、職員は総勢 40 名となりました。「全ての生命が安心して生活できる社会」になることを我々は世界平和だと考えており、そのような社会を実現することが、私達の目的になります。

僕達の活動地域は 6 か所あり、もともと始めたのは、カンボジアの地雷除去の支援活動と、地雷の被害者の生活再建の事業でした。併せてラオスでは、クラスター爆弾の不発弾によって、被害を受けた人達の生活再建事業をしています。また国内では、平和教育にも力をいれている為、私自身は年間 120 日、講演をしております。2011 年 3 月 11 日以降は、岩手県の大槌という町で、被災をされた特に高齢の女性の方に向けた生活再建の事業も行っています。



これからお話するのは、アフリカの 3 つの国で取り組んでいる、元子ども兵の職業訓練の実施についてです。僕達の活動している一つの国がウガンダです。この国は、緑豊かな温暖な気候の、農業にも適す内陸の国です。ウガンダは、商業用のビルやホテルの建設がどんどん進み、ここ数年、GDP の成長率が 5%を下回ったことはありません。もはやアフリカは、貧しいだけの大陸ではなく、豊かになるところは更に豊かに、貧しくなるところはより貧しくなり格差が広がっています。

ウガンダの南隣には、フツとツチという二つの民族の大量虐殺があったルワンダという国があります。今のルワンダは、アフリカのシンガポールと言われ、Microsoft Windows の基礎部分を全て開発しています。国家が ICT 政策に力を入れ、ビットバレーのようなものを作り、優秀な学生を留学さ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

せ、帰国後どんどん起業させています。日本の場合、起業して登記するまでには、煩雑な書類の手続きに2~3日かかりますが、ルワンダは、登記までにオンライン上で6時間で済みます。アフリカ・イコール「貧しい」と思い込んでいるとこのような変化を見抜けないでしょう。実際に何がそこで起きて、何が問題なのか、きちんと見極めていくことが、これからの時代を見据えていく上で大事なことです。

子ども兵の調査をする為に、初めてウガンダの北部に行った時は、海外安全情報によれば赤色の退避勧告地域でした。ここでは23年間、ウガンダ南側を基盤とする「ウガンダ政府軍」と、北部を拠点する「神の抵抗軍」が、ウガンダ北部で戦争中でした。神の抵抗軍は、23年間の戦争中に子どもたちを誘拐し、どんなに少なく見積もっても、2万人もの子ども達を兵士にしました。



私達が子ども兵の問題に関心を持った理由は、大学時代に始めたカンボジアでの地雷除去の活動をしていた時、何年もの間、内戦中だったカンボジアでたくさん子ども兵に出会ったからです。戦争は、見たくないこと、聞きたくないことも体験し、心に様々なトラウマを抱えます。しかし、今は既にカンボジアの戦争は終わり、子ども兵は、肉体的には大人になっています。しかし子ども兵の時に受けた傷害やトラウマに今も苦しみ続けています。つまり、子ども兵の問題は時間を超え継続しています。

地雷の問題に出会った学生の時と同様、「子ども兵の問題でも何か取り組むことができないのか」と気づいたのが2003年のことでした。問題を明らかにしないと伝えることもできず、どう対応して良いのかわかりません。だから、子ども兵の問題が現在進行形で進んでいるウガンダ北部に行きました。

この後、講演では、元子ども兵の悲惨な過去や、私達も間接的に子ども兵の問題に関わっていた背景について、また職業訓練実施の現状についてお話がありました。そして最後に、「支援や援助は、お金のある人や、力の強い人が、貧しい人に一方的に施すことでは決してない。支援をするものも、されるものも、その行為を通じて何が問題であるのか明らかにし、その問題解決のプロセスを通じて、主体者である自分自身が成長していくことである。自己変革や自己成長が伴わない社会貢献ほど単なる自己満足はない。主体者である私達が、少しずつ変わっていくことが大事である。」と、活動理念を熱く語られました。今、私達に何ができるのか、考えるきっかけを頂きました。



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 良い社会を創る個々人の意識

対談: 鬼丸 昌也氏、参加者のみなさま、岡本 和久

レポーター: 赤堀 薫里

岡本 | 鬼丸さん、今日は感動的なお話をありがとうございました。良い世の中を創るために「1人1人の人間が、どのように世の中に働きかけるか」ということですが、私は一般の生活者には、3つ立場があるとよく話をします。1つ目は、消費者としてどういうモノやサービスを選択するかにより、どのように社会にインパクト与えるのかということ。2番目は企業に関わるものとして、従業員としてその企業をどのような方向へ導いていくのか。3番目は資本の出し手として、企業をどう統治していくのか、あるいはお金をどのように寄付等へ回して使っていくのか。これら三方向の立場から個人が直接、あるいは企業を通じて、社会にインパクトを与えていくことが必要だと思っています。企業や政府が悪いというのは簡単ですが、結局、1人1人の小さな心の変化が寄り集まり、世の中に大きな変化をもたらすということ、強く感じます。鬼丸さんのされていることは、素晴らしいことだと思います。少年兵の悲惨な現実を伺えて、実り多いご講演でした。

参加者 | 私は、もう10年位になりますが、個人的に、カンボジアやフィリピン、タイの山奥等で、学校等の井戸を作ることや、畑を耕す為の牛を貸し出す活動を行っています。以前は、富裕層を中心にお金を増やすアドバイスをしていたのですが、今は現地に一緒にお客を連れて行き、お金使う教育をしています。彼らは、きっと一生では使い切れない資産を持っていますからね。



岡本 | 以前は資産家の為の資産運用のアドバイスをされていたが、今は資産活用のアドバイスを



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

されているのですね。これからの時代の移り変わりの中で、当然そういう方向になるでしょうね。

参加者 | 日本人は、お金を持っていることを表にしたがらないですね。持っている人ほど普段は G ジーパンと T シャツでいます。口も堅いので全部の資産を聞くまでには、4~5 年かかります。最近は使い方ということで、寄付の話をしますが、それでもなかなか出そうとしない。

岡本 | もっとお金持ちになると話は違ってきますよね。6 月のインベストラ이프の尾藤さんのお話の中にありましたが、ウォーレン・バフェットは『私の持っている 100 万ドルは、自分が持っても、何の意味もないが、他の人に移すことによって物凄い価値を生むことになる。お金の価値をどうやって高めていくのかということが、ある意味すごく大事である』と言っています。本当にそうだと思います。

参加者 | 私の気に入っている言葉で『資産を持つことが出来たことはとてもラッキー。自分はあくまでチャネルであり、神様が幸運をくれたのだから、神様のチャネルとして必要な人に配るのが人間だよ』というものがあります。

岡本 | 「お金というものは、人間の人格を判断するために神様がくれたテストだ」という、仏教的な考えを聞いたことがあります。世の中で「貯蓄から投資へ」と言われますが、私が証券会社に入社した 1971 年、その時の会長の新人に対するスピーチで「君たちはいい会社に入社しました。これからいよいよ貯蓄から投資の時代です。」と、言っていました。これって今、よく聞くセリフと同じですよ。要するに全然変わっていない。貯蓄から投資では、「安全なものから危ない方へ移しましょう」と、言っているわけです。それよりも逆に、「寄付から投資へ」という言いの方が普通の人を受け入れやすいのではないのでしょうか。投資とは企業を応援するということです。寄付をすれば、リターンは金銭で返ってはいきません。でも、困っている人に笑顔をあげ、その結果、自分も笑顔になるといリターンがあります。投資であれば、リターンは金銭で返ってくるかもしれない。困っている人に喜んでもらえ、その上、出した資金が増えて戻ってくるかもしれない。こんないいことはない。そう考える方がすんなりいきますよね。ミュージックセキュリティーズの被災地応援ファンドの出資は、それに近い気がします。

参加者 | 実は、私の父も森林保全の NPO 法人を沖縄でやっています。幼い頃から寄付文化の中で育った為、一般の人達に寄付文化がないことに驚きました。実際に講演活動をしている中で、「行動に変化が起こるのはどれ位の方達なのか。きっかけは何なのか」、父親の活動の参考にもなるので、よかったらお話を聞かせてください。

鬼丸 | 講演を通じて、月 1000 円のファンクラブ会員になっていただく方や、寄付をして下さる人が



長期投資仲間通信「インベストラيف」

いらっしゃいますが、そこには一つ一つの物語があります。顕著な例として、ある時、京都の事務所に桜の印が押してある手紙が届きました。開けてみたら、刑務所からのお手紙でした。僕の手紙が刑務所の中にあっただけで、それを読んでお手紙をくれたのでしょうか。その手紙の中には『あんたは、全ての人に未来を作る力があると書いてあるけれど、俺はあんたに言えないようなことをした。それでも全ての人に未来を作る力があるのか。』と書いてありました。『どうしようかな』と思いましたが、僕自身、中高生時代に、たくさんの人に手紙を書き、返事をもらったことが、この活動が続ける一つの意欲になっています。例えば、『政治家の秘書にしてくれ！』と手紙を書いたら、『まずは、高校に行きなさい。』と返ってきたりしてね。だから、自分も手紙をもらった時は、出来るだけ返事はすると考えていたので、返事を書きました。『あなたが何をしたいか知りませんし、正直、興味もありません。でも、今あなたが思っていることが大事であり、僕は全ての人に未来を作る力があると信じているし、信じたいと思います。』と返しました。すると、1 か月後に手紙と1 万円が送られてきました。手紙には『これは、刑務作業で稼いだお金です。これをあなたの会の会費に充当してください。私も、自分に未来を作る力があると信じます』と書いてありました。今でも、1 年に2 回位手紙が届きます。

岡本| 鬼丸さんがその人に気づきを与え、その人の人生を変えたのでしょうか。魂のこもった言葉の力ですね。

鬼丸| その事例や、15 年間話を聞いてくださった人達の変化を見て思うのは、『誰もが誰かの為に何かをしたい。』という気持ちが根底にあるんですね。ただこれは、僕達業界の怠慢かもしれないかもしれませんが、そこに適切な投げかけをしていないわけです。内閣府の2013 年の統計で、寄付に対する調査がありました。「なぜあなたは寄付しないのですか？」という変な質問に、一番多いのが、「信頼できる団体がない」でした。そして、3 番目位に多かったのは、『呼びかけられなかったから』と全体の3 分の1 が答えています。となると、確実にその方達は、適切な呼びかけをしたら寄付をしてくれる可能性があり、我々がリーチできていなかったわけですね。つまり、いいことをやっているだけでは駄目で、いいことの情報を求めている人達にどう伝えていくのかということです。僕はその手段の一つとして講演を行い、ボランティアの人達に協力をいただき多くの人に伝えていただく。いろいろなやり方をチャレンジしていくことを、僕たち自身も試されている時期なのかなと感じます。

参加者 | 私は行動経済学の勉強をしているので、行動経済学と寄付を考えることがあります。人間というのは、基本的に利己的である。でも寄付は利他的な行為で利己的ではないと言われますが、あれも十分利己的です。「そういうことをすることによって、自分が心の満足を得る」ということですからね。「本当にその人の為に」、ということがあるのかもしれませんが、結果としては、自分の心の満足につながっていくわけですね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本 | 要は、出したお金がどうなるというよりも、相手が喜んでくれれば、自分も嬉しいという単純なレベルであり、それは先ほど鬼丸さんが言っていた人間に備わった本能なのかもしれませんね。「自利他利一如」という言葉もあります。つまり、他利＝自利なんです。

鬼丸 | ウガンダで、元子ども兵士が我々の職業訓練施設を卒業すると、必ず後追いの調査をします。最初に得た収入を何に使うのかと聞くと、大体 9 割くらいが、他者の為に使います。実はそれは自尊心につながってきます。元子ども兵士のフラッシュバックやトラウマの軽減具合は、彼らの自尊心が高いか低いかにによって大きく変わってくるのです。元子ども兵士は、他者に貢献することによって自尊心が回復するということを、無意識の中で知っていたんですね。だから人間の機能として捉えることが十二分にできると思います。

岡本 | 寄付をもっと気楽に皆がやるようになってくるといいですね。確かに宗教的なバックグラウンドも多少あるかもしれませんが、人間に備わった本能的なものがすごく大きいと思います。結局、お金はそのものが喜びをもたらしてくれるものではない、お金をどのように幸福感とか満足感に変換していくかということが重要なのです。先ほど、寄付だって他利ばかりではなく自利でもあると言うコメントがありましたが、それはその通り。でもそれでいいのでしょう。お金を媒体にして人も笑顔にして、自分も笑顔になる。それこそ本当の金遣いの王道のような気がします。今日は色々、考えるチャンスをいただきありがとうございました。



中国がわかるシリーズ 28 海の中国とウイグル、トゥプトの興亡（中）

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明氏

均田制に基づく租庸調制は、玄宗の時代に既に破綻しており、安史の乱で収入が途絶えた唐室は、第五琦の献策に基づき、758 年、塩の専売法を導入しました。これで一息ついた唐室ではありませんが、河朔三鎮などは、中央政府に納税しなかったため、780 年、代宗は、宰相、楊炎の献策により、両税法を施行しました。これは、6 月に納める夏税(対象は麦)と 11 月の冬税(稲、粟)から成る資産比例税でした(荘園や大土地所有を政府が追認)。銭納が原則であり、税率は、毎年の必要経費(支出)に応じて変動する仕組みとなっていました(それまでは歳入に応じて歳出を決めていました)。人頭税・力役を根本原則とする平等主義的な中国古来の税制は、ここに大変革を遂げたのです。

両税法は宋代に完成する財政国家への道を切り開きました。また、両税法の施行に先立って、前述したように、塩の専売が行われ、次いで、酒と茶の専売が始まりました。遊牧民の軍事力の延長にある軍事政権としてスタートした唐は、税収で傭兵を賄う性格の異なる政権へと変貌したのです。

794 年、日本は、新しい都(平安京)に遷都しました。王統が、天武系から天智系に変わっており、人心一新の必要があったのです。805 年に即位した唐の第 11 代、憲宗(～820)は、中興の祖と謳われた名君で、宰相、杜佑(制度史「通典」の著者)などを用いて、禁軍(皇帝直轄軍)を強化し、河朔三鎮を除く節度使をほぼ押さえ込みました(代宗時代から、中唐の時代)。この背景には、両税法による国家財政の好転がありました。しかし、仏教に熱心だった憲宗は、晩年、不老長生薬に手を出し人格が蝕まれて宦官に毒殺され、以後、宦官の勢力がさらに増大しました。官僚は官僚で宦官に牛耳られた閉塞感から、牛李の党争(808～846)と呼ばれる派閥争いに明け暮れ、徒に国力を消耗させたのです。

生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（前編）

岡本 和久

8月15日は終戦記念日です。1945年8月15日、玉音放送によって戦争が終わりました。戦中、戦後の体験をされた方々もだんだん減ってきています。しかし、極限状態を体験された人々の強いこと。多少のことでは動じない「生き延びる力」を感じます。平和が長く続き、安楽な生活に多くの人が慣れ親しんでいます。それはとてもありがたいことです。しかし、また、何か大切なものをわれわれは失いつつあるのかもしれません。その意味で、今、戦争体験を文章の形にして皆さまにお伝えすることは意味があるのではないかと思います、今月と来月にわたってこの企画をお届けする次第です。

2011年3月11日の震災はわれわれの魂を揺り動かす出来事です。多くの方々が筆舌につくせぬ苦しみと悲しみを抱えられました。しかし、若くして戦災を体験された人たちが強烈な生き延びる力を得られたのと同様、これから多くの「強い」若者がたくさん出てくることだろうと思います。そんな確信を持ちながらこの記事を書かせていただきました（なお、取材記事は私が取材録音したものをできるだけ忠実に文章にしたものです）。

壮絶な引揚げ、極貧の戦後を生き延びてつかんだもの

上田卓さん、上田早苗さん

上田卓さんは読売広告で取締役を務められた後、現在、ティー・エム・ジェイの専務取締役としてマーケティング・プロデューサーをされています。上田卓さんの妹の上田早苗さんはイギリス、スイス、アメリカ、香港、タイなどで日本語教師として海外勤務を経験、現在は日本語教育アドバイザーとして活躍、同時にフリースクール「上田学園」を主宰されています。

◆上田卓さん

私は1937年に、今は中国ですが満州で生まれました。父は満鉄（南満州鉄道）の技術畑の人間でした。母も同じく満鉄の研究畑の人でそこで二人が知りあって結婚、そして私が生まれました。葫蘆島（コロトウ）というところに住んでいました。その後、大連に長くいましたが、とても幸せな生活を送っていました。中国人の女中さんや畑を手入れしてくれる人などもありました。

父親は満鉄にいたということもあり、ある程度、戦局の実情も聞いていたようです。たまたま、1944年（終戦の1年前）大連港の埠頭に焼夷弾がひとつだけ落ちたのです。それがどうもアメリカ軍のもののようにだということで騒ぎになりました。父は、これはいよいよ米軍が満州にも来るだろうということでわれわれ家族を疎開させたのです。ハルピンの先に綏化（スイカ）というところがあります。そこから先はソ連領です。日本はソ連とは不可侵条約を結んでいましたから、北の方へ避難すれば大丈夫だろうと考えたのです。父は大連に残り、われわれ母親と私と弟3人とメイドさんなどを連れて移動をし、綏化の日本人町に落ち着きました。綏化での生活も幸せでした。ある意味、戦後、日本に駐留していた米国人のような生活だったのです。今から考えれば天国でしたね。そこで終戦となったのです。



終戦の当日、私は夏休みで家にいましたが、あの気丈な母がワーと泣きだしたのです。ラジオが鳴っているのですが、私は意味がわからない。なぜ、母親が泣いているのだらうと思い、私はオロオロするばかりでした。「お母さん、なぜ泣いているの？」と聞いてもわからない。夕方、まだ、明るいうちでしたが、母が私に「弟たちを集めて」というのです。母の部屋で車座に正座しました。そこで母は「実は、日本は負けたのよ。天皇陛下さまがそういうお話をされて、もう、日本はなくなるのよ。私たちもう生きてはいけない。それで、今日、ここでみんな一緒に天国へ行きましょう」というのです。母は何か青酸カリのようなものを持っていたようです。それを水に溶いて渡されました。「これを飲むと天国に行けるのよ」と母が言うのです。そして、本当に飲む寸前までいきました。でも、そのときどういうわけか私がそれを止めたのです。どうして止めたかかという、とお母さん、お父さん、帰ってくるんじゃないの？ 僕たちだけが天国に行ったら、お父さんかわいそうだよ。お父さんが帰るまで待とうよ」と言ったのです。それで母親も正気に戻ったのだと思います。とにかく、それではお父さんを待とうということになったのです。それで生き残ったのですが、それからが実は大変でした。

ソ連兵が拳銃を持ってどんどん入ってきて略奪、暴行を行います。ソ連兵の多くは罪を犯してシベリアに送られた人々です。兵隊といっても「弾よけ」ですよ。彼らがどんどん入ってくる。中国は軍隊を持っていなかったので一蹴されてしまった。あるとき、若い娘さんがうちに逃げ込んできた。そのあとをソ連兵がわめきながらどやどやと入ってきた。その娘さんを犯そうとしていたんですね。母はすぐにわれわれ子どもたちに「お便所に隠れなさい」と言いつけました。そのあと、外では大騒ぎがあってソ連兵が出ていった。母がわれわれを出してくれましたが、その娘さんはワンワン泣いている。そのようなことがあちこちでたくさんあり、その当時のことでもあり、自殺をした娘さんもたくさんいたと聞いていた、と聞いていました。



その後もなかなか父親が帰ってきません。理由は明確でした。当時、満鉄の課題は関東軍の日本兵をシベリアに送ることでした。そのための鉄道の操作は中国人だけではできなかったのです。そのために父親も手伝わされていたんですね。綏化はシベリアに行く最後の給油地でした。電気でも動く電車ではない。蒸気機関車は水と石炭が必要です。ほとんどが貨物列車で屋根がありません。そのなかに日本兵が動物のように缶詰になっている。それをソ連兵が自動小銃を持って見張っている。逃げたらすぐに撃ち殺される。燃料を綏化で積んでいる間、ソ連兵は暇です。そこで人間を的にした射的をするんです。私も狙われました。母親には絶対に外に出てはいけなと言われていたけれど、こちらはまだ幼い子どもです。目を盗んで外に出る。友達と二人で外で話をしていた時に、たまたま、そこに中国人が通り、その中国人がひっくり返ったのです。見ると撃たれているのです。中国人がみんな集まってきて大騒ぎになりました。これは僕が初めて人が殺されるのを見た瞬間でした。それが私は8歳のときでした。

それから引き揚げになりました。兵隊はシベリアに連れて行かれたけれど、そのほかの人たちは日本に送り返すと決まっていたようです。父親も綏化によりやく来ることができました。逃げようとして殺された兵隊は数知れません。兵隊をシベリアに送り折り返してきた最後の貨物車に乗って、家族は大連に戻りました。大変な数の人たちが押し込まれていましたが、朝になるといなくなっている人もいました。おそらく汽車から落ちてしまったのでしょう。汽車が途中で止まってしまい、そのあと撫順(ブジュン)まで歩きました。そこに収容所のようなところがあり4カ月を過ごしました。そこで生活をしていたのですが、食べるものもありません。中国の人が食べ物をくれたのがありがたかったです。

撫順にいたときに弟が一人亡くなりました。栄養失調です。中国でも蒋介石と毛沢東の戦いが激化して、それに巻き込まれて撃たれて亡くなった方もたくさんいました。そして、その収容所の中で生まれたのが早苗です。母が穿いていたモンペのなかで生まれました。というのは、母親は妊娠していたのですが、お昼の食べ物を探すために動き回っているうちにモンペのなかで急に生まれました。周りの人が「あ、生まれる！ 奥さん、寝て、寝て」と叫んだと言います。

◆上田早苗さん

それが私です。

◆上田卓さん

この子は多分、生きながらえることはできないだろうとみんな思っていた。そんなとき、中国人が「子どもをくれないか」と聞いてきました。父親は「このままでは生きていけるかどうかわからない。子どもだけでも中国人にあげよう」と言ったのですが、母親は「どうせ死ぬならみんな一緒にのほうがいい」と言い、それは実現しませんでした。そこから葫蘆島に汽車で行くことができ、そこにアメリカ軍の貨物船が来ていたのです。その貨物船で数日かけて舞鶴に帰ってくることができました。船で食べたアメリカ軍のスープとパンがいかにおいしかったことか。生まれてからこんなにおいしいものは食べたことがないと思ったほどでした。ほとんどまともなものはずっと食べていませんでしたからね。

舞鶴から東京に引き上げ、麻布中学のすぐそばの倉庫が引揚者寮となっていたのでそこに落ち着きました。ローンテニスクラブが近くにあり、アメリカ人がテニスをしていました。テニスボールが場外に飛んで来るとそれを拾って食費を稼いだりしました。父は満鉄もなくなってしまって、仕事もない。それでガードマンのようなことをしていました。私のすぐ下の弟も栄養失調で亡くなりました。男の兄弟が四人いたうちの二人、一人が中国で、一人が日本で栄養失調で死んだのです。今でもよく覚えています。母親が「さんざん苦労して、せっかく日本にまで帰ってきて、もう大丈夫と思ったとたんに死んでしまった」と泣いていました。私はがむしやになんでも食べるタイプでしたが、弟は好き嫌いがあり、母が「好き嫌いはいだめよ。好き嫌いがあると、結局栄養を摂れなくなってダメになってしまう」とその後もずっと言っていました。棺もなかったのです。ミカン箱を改造してそれお棺にして荼毘にふしました。

◆上田早苗さん

麻布の引揚者寮で、朝起きたら天井に空が見えるのです。台風が来て屋根がすべて飛ばされてしまったこともありました。

◆上田卓さん

父がガードマンで、母はアルバイトをしていました。父は夜勤も多く、結局、私が長男だったので家事は私が見よう見まねでやっていました。弟たちと一緒にやっているうちに、だんだん知恵がついてできるようになってきました。当時、水泳の古橋広之進ががんばっていました。私も水泳をやっていたんです。かなり上手でみんなにほめられる。それが何か生きる力になっていました。そういう意味では何か前に向かって進んでいました。やはり、引き揚げまでの極限状態があったので、それと比べればずっといい。あの苦しみがバネになっていますね。今、若い人にも「ありがたい世の中でそう簡単に殺されるわけではない。どんな大変なことがあったって、そこがどん底でそこからよくなると思えばいいじゃないか」と話しています。人間の世界って面白いものです。みんな、一生懸命に必死で生きていました。

引揚者寮には小学校6年までいました。いろいろな所で引揚者寮ができていたので6年のときにそこを出て、三鷹の寮に移りました。それで少しずつ生活も安定してきた。

◆上田早苗さん

私は有栖川公園近くの幼稚園に行っていました。大使館が多いので外国人の子どもが多いんですね。外国人の子どもが泣いているのを見て、家に帰って「お母さん、キューピーちゃんが泣いてたよ」って報告をしたりしたものです。「何かね、四角いものがあってね、それを食べているんだよ」と報告する。いま思えばサンドイッチです。日曜日にはパンを買ってもらえました。兄たちは私のために一つだけコッペパンを買ってくれました。それを有栖川公園に座って食べました。それが本当においしかったです。学校の給食もとてもおいしかったです。今から考えればとても食べられない味でしたけど。周りがみんな貧しかったので。



よく覚えているのは、みんなでケーキを「見に行きました。食べるのではない、見に行くのです。ケーキ屋さんが近所にできました。そこにクリスマスのケーキが飾られていて、ケーキの家の横にお菓子のトナカイがありました。母がそれを見に連れて行ってくれました。「これはね、ケーキと言って食べられるのよ」って教えてくれました。「本当にこれが食べられるの？」と聞く私に「そうなのよ。クリスマスっていうキリスト教のお祭りがあって、そのときにこれを食べるのよ」と教えてくれ、それを見に行くのが楽しみでした。何度も行ったものです。

母は「貧しくてもいろいろなことを知るべきだ」と考えていました。それで、本当にボロボロのかっこうだったのですが、国会議事堂などいろいろな所に連れて行ってくれました。武蔵野市に引っ越すことを決めたのも教育を考えたからだと思います。もうひとつの引っ越し先の候補は品川でした。そのほうが仕事は多かったそうです。でも、三鷹駅前には母の大好きな国木田独歩本、『武蔵野』の碑もあるし、教育には三鷹のほうが良いということでこちらにしたそうです。

◆上田卓さん

賃貸の引揚者寮でした。長屋のようなアパートでした。みんなが助け合っていました。当時の私の楽しみは映画でした。欧米の映画を、アルバイトをして得たおカネで観に行く。映画のなかは世界が違うんですね。ですから、映画を観ている間は、楽しい、おいしい世界がある。そこに2時間ぐらいいる。出てくると「ああ、よかった。次の映画を観るまでがんばろう」と思ったものです。世界の差を感じましたね。アメリカ人家庭の使用人をしている家の子どもが友人でした。その家に行くとアメリカ人からおいしいものをもらえる。それを食べさせてもらえることも楽しみの一つでした。時代の知恵というのでしょうか、極貧のなかでもお互いに助け合い楽しみを見つけていました。



現代の日本を見て一番気になるのは「心」ということです。マスコミなどで餓死などのニュースが取り上げられています。でも、本当のことをいったら、少し考えれば生きられないことはない。仕事だって選ぶからない。俺は捨てられたとか、俺はダメになったとか言っているけれど、それは多くの場合、心の問題です。少し、心のあり方を変えれば道が開けてくる。苦難は人を成長させます。どん底で「よーし！」という心が必要なのです。戦争がいいわけではないが苦難は必要です。苦難が人を強くする。苦難のない時代が長く続いたので、みんな弱くなってしまった。「なんでそんなことで、自分がダメだといって自殺しちゃうの」と思うことがとても多いです。大学卒業して3カ月ぐらいで、せっかく就職した会社を気軽に辞めてしまうんですね。考えられないですよ。昔だったらビンタをしても残らせます。今、そんなことしたらすぐ新聞ダネになってしまう。鍛える側も厳しいことができない。鍛えられる側はすぐにいなくなってしまう。ですから、私から見ると今の社会って幸せそうに見えて意外に不幸だだと思います。

◆上田早苗さん

今、「みんなぼっち」という言葉があるそうです。みんなというけれど一人。政府がいろいろと援助するけれども、人間の尊厳が大切にされていない。何か大切なものが骨抜きになっている。福祉という名のもとに一番大切なものが失われている。それが孤独感になっている。

◆上田卓さん

最近は何かが足りなければすぐそれを与える。でも、「足りなければ作れ。それを応援するよ」というのが本当の姿です。政府もおカネさえ出せばいいと思っている。何かが欲しいと小さい子は「ママー」と泣き叫ぶ。泣くのを止めさせるために欲しがるものを与える。そういう子どもたちが今、大人になっています。怖い話です。モノがありすぎるのも人間社会にとって問題ですね。若者に言いたいことは、人間も、すべての動物もエゴの存在だということです。みんな、自分がよくなりたいと思っている。ただ、自分が幸せになるためには人とのつながりが大切です。人を大切にしなければ自分は幸せになれない。一時的でもいいから自分を少し引いて相手をたてる。そうすればその人は決してそれを忘れない。自分が困ったときに助けてくれる。弱肉強食の動物の世界でも、結局群れを作って助け合っている。「最大のエゴのためには人を助けよ」ということを一番言いたいですね。自分の取り分を減らしても人に譲る。それが自分のためになる。気がついたら自分が一番幸せになっているのです。

若いときの苦労は買ってでもしろ！

田中義博さん

新日本証券副社長、太陽投信（現新光投信）社長を経て現在、太陽インベストメント・アンド・コンサルティング代表取締役。ニューヨーク、ロンドンなどに駐在経験を持つ。

僕は昭和7年、1932年の生まれです。今年10月に80歳になります。父は、当時のブリジストンのいわゆるノンキャリアの職工長でした。夜間の工業専門学校しか出ていない技術者でした。同社は地下足袋から始まった会社でしたが、すでに自転車、自動車、戦闘機・爆撃機のタイヤ、靴（軍靴）などを作る会社で、いわば軍需産業だったのです。ある程度、戦争が始まることはわかっていたんでしょうね。同社は青島とジャカルタ、そして台北に製造拠点をやることを決めたのです。父は台北の工場を作れという命を受けて技師四人で赴任しました。それが昭和12年です。私を含め家族は昭和14年に父と合流、小学校1年生でした。当時、台湾には日本人が60万人いました。完全な日本の植民地です。台湾府の総督は陸軍大将か、海軍大将。父は技術の親玉で、下に台湾人が5～600名いました。子どもを戦争に行かせたくないで富裕層の台湾人は息子を軍需工場に入れたいわけです。軍需工場で働いていれば軍隊に行かないでよかったのです。それで台湾人の金持ちがいろいろなツテを頼って息子を入れようとしていたのです。



私は台北一中という日本人学校に入学しました。約50人のクラスで、そのうち4～5人が台湾の富裕層の息子でした。中学は台北一中が原則、日本人だけ、二中は台湾人だけ、そして三中は日本人と台湾人と分けられていた。私の入った一中にはごく少数の台湾人がいたのですが、彼らはものすごく優秀でした。成績トップはいつも彼らでした。彼らは日本が追い出された後、みな立身出世をしています。

中学には入ってもほとんど勤労動員で勉強はしませんでした。1、2年生は勤労、3年生は軍隊に組み込まれていました。すでに、米軍は沖縄に上陸をしていました。次は台湾だという危機感が高まっていました。まあ、「たぶん敗けるのだらう」と思いつつ軍需工場などで働いていました。空襲も日常的で随分多くの人死んでいました。顔のない死体がゴロゴロしていました。わが家も沖縄から逃げてきた人のための避難所になっていました。総督府に1トン爆弾が落ちました。地下まで貫通して地中で爆発するのです。すべてが飛ばされてしまう。学校も半分は崩壊しました。

終戦を迎えたのは中学1年のとき、そのときは農業試験場に動員されていました。暑い日でした。天皇陛下の玉音放送があるとは聞かされていましたが、ザー、ザーという雑音ばかりで何も聞こえない。終わったら先生が「敗けた」と言ったのです。両親も軍需産業に勤めていて戦況がわかっていたので、それほどのショックはなかったように思えました。戦争が終わって1週間ぐらいで授業が再開しました。先生たちは立派でした。英語の授業も始まり、数学も物理も化学も日本語の国語も、そして中国語も開始されました。後年、仕事で中国に行ったとき「あなたの中国語の発音はいいね」とほめられたものです。そのころから台湾人同級生の報復が始まりました。クラスのガキ大将だった男は学校の帰りに待ち伏せされ、ひどい目にあわされました。幸い、僕はガキ大将の子分でしたから直接的に暴力を受けたことはありませんでした。台湾人学生連盟というのができて暴力で報復する。戦中はガキ大将が台湾人を殴っていた。それでも彼らはだまって我慢していた。まさに報復でした。授業が始まる前に学生連盟がダミーと教室に入ってきて黒板に大きく「犬」と書く。中国で犬というのは最大級の侮辱的な言葉です。「貴様たちは犬だ。このなかで台湾人の同級生をいじめた奴は立て」と言われる。しかし、誰も立たない。立ったらやられる。そうすると「やっぱり犬だな」とあざ笑いながらガキ大将を殴る。



終戦までは工場などでも台湾人の職工を殴るのは日常茶飯事でした。戦後、父のところにも報復が来しました。幸いに叔父が陸軍軍曹だったのです。父は彼の所属する分隊を工場で働かせるという便宜を図っていた。槍、刀などを持った中国人が報復に来たときに、すぐ私は叔父のところに飛んでいった。「おじさーん、来たー！」と叫んで飛び込むと叔父などは銃剣や刀を持って助けに来てくれた。わが家でも押入れのなかに日本刀を隠し持っていました。それは使わないですみました。倉庫なども武装強盗団に襲われたりしていました。守衛さんは頭を槍で突かれながらも守衛室まで走りサイレンを鳴らしました。サイレンを聞き、銃剣

道5段、剣道名誉7段だった父は防空頭巾をかぶってわが家の日本刀を持って駆け付けていました。トラックで台湾人部落にまで追い返す。そのようなことはたくさんありましたが、満州でロシア軍が攻めてきたというようなことはなかったですね。やはり、日本が台湾ではいい政治をしたということがあったのではないかと思います。あくまで個人的な怨恨を晴らすという感じでした。

私が病気で寝ていたときの事です。父は米軍の良い毛布を手に入れていました。その毛布で私が寝ていたのです。そこに中国人の警察官が靴のままわが家に入って来しました。大きな拳銃を突きつけながら「この毛布をよこせ」というのです。母は懸命に日本語で説明して泣いて頼んだ。結局、他のものを持って帰りました。そんな生活をしつつ昭和21年4月に帰国しました。国家を失った民族の悲哀をしみじみ感じましたね。

帰国して父の兄の家に居候となりました。親子7人が6畳一間と3畳、しかも、そこは養蚕のための部屋でした。父の兄は貧乏百姓だったのです。しかし、農地解放になり大地主の土地をもらえることになった。それである程度の自作農にはなっていました。幸い父はブリジストンに復帰できた。何階級か格下げになり、父は随分悔しがって泣いていました。当然、給料も下がる。とても安月給では7人家族を養うことはできない。当時としてはみんな生きるためにやっていたことかもしれませんが、闇の取引などにも手を貸していたようです。中学生の私も闇の品の運び屋まがいのことをさせられました。早朝に墓場で商品を渡すのですから、いくら子どもでもこれはよくないことなのだとわかりますよ。でも、生きるためにはそれも仕方なかったし、みんなそうやって生き延びるために何でもしていたのです。

戦争中に父は兄に3000円送金していました。帰国したら家を買おうと思っていたのです。昭和15～16年ごろですから3000円もあれば家を買えたのです。ところが叔父はそれを銀行に入れてしまった。そうしたら、預金封鎖です。一人500円しか預金を下ろせない。しかも、戦争に敗けて帰ってきたら3000円といっても米20～30キロぐらいしか買えない。大インフレが始まりつつあったのです。とにかく絶対的に物がなかった。

半年ぐらいで叔父の家をでて、父の実家のあった博多から15キロぐらいのところの社宅に入れました。父は何としても田んぼを買わなければならないと思っていたようです。とにかく、6000円ぐらいで棚田を買ったのです。博多の町まで流れる大きな川の支流の上流にありました。良い米が取れるのです。その棚田を耕す仕事が私と弟にまわってきました。当時は化学肥料などありません。そこで叔父の家にある牛車を借りて、空の樽を満載にして、博多の町まで15キロ行って肥えを買って歩くのです。人糞の汲み取りですね。隔月に一升ぐらいのコメを渡して売ってもらっていた。お得意先が何十軒かあったのです。樽を人糞で満載にして、それからまた牛車で15キロ帰ってくる。とにかく、そうして苦勞して30万円ぐらいのカネを貯めたんですね。それでまた、別の家と田んぼを買ってという風にして増やしていったんです。

高校に進学するときに、叔父は私を線路工夫にしようと考えたようです。父は「自分は学校に行っていないからこの子は行かせる」ということで進学しました。大学に入試するときも九大に入れなかったら就職しろと言われていました。結局、九大に入学して、大学を昭和30年に卒業しました。学資は全部自分で調達しました。奨学金ももらい、アルバイトをして、衣類まですべて自分で稼いだカネで賄いました。父は会社を辞め、雑貨と野菜を売る店を始めました。少しずつ土地も値上りを始めました。さらに雑貨屋を処分して今度は西鉄の駅の前に土地を買い、書店を始めました。すぐそばに高校ができるという情報を得ていたのです。書店をやりつつ学校や役所に出入りしているうちに市会議員になりました。次に書店も売却し、自宅のそばにビルを建てました。その意味では5人兄弟で本当に苦労したのは上二人、下はそれほど苦労はしませんでした。まあ、もちろん、今の若者とは比べものにならないでしょうけれどね。父は市会議員を16年勤め、勲六等の勲章まで最後はもらいました。



必死の思いと覚悟でもって大日本帝国のために国民皆が力を合わせて頑張ってきたが、祖国は米国に破れました。当時、台湾にいた日本人は1945年8月15日をもって祖国を失ったのです。青天白日旗を振りながら天秤棒と銃と身の回り品を担いで行進していく支那兵を出迎えさせられたあの屈辱は忘れられません。強い祖国があつての国民の生命・財産の安全です。父は身の危険にもあいました。そして、すべての財産を失いました。

私は1972年に初めて米国ニューヨークに赴任しました。超大国アメリカの巨大な力に圧倒されましたが、逆に「俺は日本人」である、いくらアメリカに敗れたとはいえ、日本人としての魂まで失ってはならない。必ずや日本を復活させ、欧米列強に伍してその存在をあらしめる国にしたい。そのために力の及ぶ限り、自分の専門分野(投資銀行業務)で欧米の大金融機関に恥ずかしくない仕事をしたいと念じながら今日まで頑張ってきました。

若い人たちへのメッセージですか? 「若いとき、苦労は買ってでもしろ」ということです。そして、「その苦労に向かっていけ。苦労をすると新しい自分が見出せる」ということでしょうね。「若い人たちよ、今からでも遅くない。世界に飛び出して行って日本人の存在を示してもらいたい。そのためにはわが国の歴史・文化を改めて学び直し、かつ、相手国の民族・歴史・文化をしっかりと勉強してほしい」それを一番、言いたいですね。

空襲敢闘記

岡本 茂和

私(岡本和久)の父(岡本茂和、1917年生れ、2000年没)は「空襲敢闘記」という随筆を残しています。1945年5月24日の深夜にかけて一家の住んでいた東京都目黒区大岡山付近が空襲にあい、辺り一面が焼け野原となりました。そのなかで父をはじめ親戚や近所の人たちが必死に自分の生活を守っている様子が書かれています。国と国との戦争に翻弄される民衆、そのなかで必死に自分たちを守る人々、今から60数年前にあった事実を風化させないためにも皆さんに読んでいただきたいと思います。ここに掲載させていただきます。

昭和二十年五月二十四日午前零時半頃であつたか、確かな記憶はないが突如警戒警報を知らせるサイレンが鳴り響いた。早速、ラヂオのスイッチを入れると敵数機が帝都に近接しつつある旨放送している。考えて見れば前回以来一ヶ月余、昼間一度立川へ多数機で来襲したのみにて静寂に戻っていた帝都であつた。其間約一ヶ月、吾家に於いても大きく時を稼いでいた。その前夜、疎開先の祖母様から御手紙があり次の便で送らねばならぬ品物を話し合ったりしながら、今月から御米差し引きとなった丸パンを食べた。しかも丸パン一日分二個を一度に「うまい、うまい」と頬張り、残っている御飯でお茶づけを食べ、寝しなには更にその日小生が会社で配給された海宝麺を「ひじきと変わらぬ」等云いながらお皿一杯試食して、それこそ超満腹感を吃しながら九時前後床に就いたのであつた。

サイレンで起こされた時も又、敵大軍来襲の報道を聞いた時も、実に吾ながら平常と変わらず、寧ろより以上に落付いていることができたのは実は前夜の栄養食が腹に一杯ありそこから力がもりもりと泉の如く湧き出ていたからであった。当時、ラヂオは不絶情報を伝えていたが記憶にない。只刻々と迫る敵夜間大空襲の前ぶれを放送していた様だ。始めて隣組防火郡副部長の腕章をつけた。何だか急に力がついて来た様な気がした。みどり(妻)もすばやく自身の用意を整え持出す荷物を玄関に揃えていた。みどりと二人で順序よく完成したばかりの中壕にハシゴをつたって先ずトランク立てに信玄袋、それに其前日持ち帰った海宝麵の一包、座布団、蒲団包等を押し込めて蓋をした。門の傍の壕にも木箱等入れて先ずはこれで一安心と云う処だ。

照空燈に照らされて敵機が一機、又一機、三四千の高度であちらこちらを飛び廻る。見る見るうちに南方の空がまず赤くなる。次いで北方の相当はなれた処にバラバラと焼夷弾が落ちて行くのが花火のように見える。と突然頭上を通った一機から落としたのであろう身をつんざく様な落下音と共に成功館付近より火の手が上がった。愈々身近に落ち出したかと思うと思わず身のしめる感がする。空からは焼夷弾の油片が赤く燃えながらあちらこちらに落ちる。前の畑にも一つ。早速とび口でたたき消す。桜の木にもひっかって燃えている。皆盛んにガヤガヤ叫び声を立てて消火に懸命だ。これなら「延焼の心配なし」と思ってすぐ家の前に戻り上空を警戒する。盛んに火のついた油片が落ちて危険極まりない。特に家の垣根によくひっかかる。小さい油片なのでたたけばすぐ消える。があちらこちらなので漸く忙しさを増して来た。

折から家の真西より飛来してきた敵一機、頭上より約五十度位手前にてバラバラバラバラと火の粉が落下した。「これはいかん」と思うとたんにザーザーと云う物すごい落下音、思わず門前の街燈に身をよせた瞬間、パリパリ、ツドン、パリパリ、ツドンと云う屋根を貫く音。火の手は我家よりわずかに南へ三軒目の家の前当りから上がった。皆、消火を始めたのでこの分なら延焼は大丈夫と又しても危中に一安心を見つけた。がしかしそれから一、二分も経ったであろうか、又も同じ西方上空に一機来襲、同一個所で焼夷弾を落下した。今度は駄目かと思う一瞬、火の手は家の前の谷を横切って落下。一本の帯となって火を吹き上げた。始め風向は北風で成功館の方より火の粉の飛来するのが心配だったが後には西風に変わり谷向うから吹きつける。前の谷の溝より南は火の海だ。隣が焼ければ家が危ない。取るものも取り敢えず駆けつけて水をかける。隣には若い女の人がおり小生二人にて水をかける。たちどころに用水槽の水が無くなる。家のものも無くなる。然し一軒先の家の火はいよいよ燃え盛る。風呂場の水に気がつき一生懸命に隣のはめ板に水をかける。体は水でぬれてぐしゃぐしゃ靴も目茶苦茶、ブカブカしてすぐぬげる。風呂場の水もたちまち使いつくした頃、火は残念ながら隣の二階に移り始めた。二階には水がとどかない。その上その水さえ遂に補給がつかぬ。「もう之までだ」、自分の家を守ろうと思って家に引き返した。

家の台所近くに来るや否や又々新しい焼夷弾が次、次へと落ちている。此時、一発は異様な音を立てて遂に吾家の台所天井を貫いたらしい。外より見ると台所中、硝子越しに真赤になっている。「畜生！ 遂に落ちたか」、今迄、今の今迄は大丈夫と思っていたが。体は隣家の消火で既に疲れ切っている。台所の木戸口に走り寄ったら運悪く中から閉って開かない。力にまかせて木戸をたたき破り中に入る。既に台所中、一面、火の海だ。中に入ったが水が無い。水道は勿論出ない。大声で叫んだが誰も居ない。どうにも手のつけ様がない。困った揚句、家の中に駆けて行った時、ふと足許の掛蒲団に気が付いた。「これだ、これだ」とすぐ大きな掛蒲団を一枚ひきずる様にかついで来て台所の戸棚の前の火点にかぶせて足でふみつけた。蒲団の四方から火がふき出る。丁度此時、近所で人が小生の声にかけつけ、一、二杯水を呉れた。蒲団の上からかけたが大した効果もない。そこへさらに近所の人が水をもって駆けつけてくれた。すぐかける。然し次の水までの間が長くて火は仲々劣えぬ。このとき天佑か神助か、蒲団で火力を押さえているそのすぐ下に土釜が二つあり、しかもその土釜に夫々水が一杯入っているではないか。「これだ、これだ」、すぐお釜二杯の水で蒲団をぬらし次の水を待つと不思議と急に火力は劣え始めた。「しめた、しめた」、もう大丈夫だ。そう思っている中、ご近所の人たちから夫々数杯の水補給あり遂に消し止めた。

「消したぞ」、大声で叫んで台所から出るや否や、今度は隣家の二階が炎々と燃えている。今度は「家に水をかけろ」と叫びながら一心不乱に水をかける。裏口よりみどり、隣に住む叔父一家、皆代り替りに庭より水を持って来て小生に呉れる。羽目板にどんどん注ぐが、すぐ湯気になって消えてしまう。吾家もついに燃えるかと思ひ荷物を運びだすことを考えたが、すでに壕にいろいろな物をみどりが入れてあったので安心。焼けても大丈夫と思いつつも、此の後、いよいよ最後に持出すべきものを頭の中で数え上げた。御位牌、ラヂオ、自転車……。しかし、家は燃えぬという信念の下に消火しているのだ、これらのものは最後まで持出さぬと決心、消火に専心する。もしここで持出せば皆の気持ちが乱れる事を恐れたからだ。こうしてどんどんどんどん水をかける。家の井戸、隣の井戸と両方から補給して呉れる。

周りでは「あと五分だ、頑張れ頑張れ」と連呼している。小生もそれに呼応して水をかける。既に炎はこちらになめかかって来る。顔が暑い。焼けつく様だ。思わずバケツの水を頭からかぶる。数分経つと又耐えられなくなる。又水をかぶる。全部で明け方まで何杯かぶった事だろう。バケツリレーの水もなかなか間に合わぬ。そこで杓子でドブ水をかける。全く夢中で水をかけていたら遂に最悪の場面に直面した。即ち炎上している隣の二階が家の上に押しつぶさって倒れかかって来たのである。愈々絶体絶命、思わず持っていた柄杓で支えた処が先の金の桶が取れてしまった。思わず素手にて支えはねかえした。そばで叔父様が「手では危ない、何かないか」とおっしゃって居られたがそんな暇はない。今考えてやけどをしなかったのが不思議な位だ。疲れた体に一心にお念仏を称えながら、神仏の加護を祈りつつ消火に縦横無尽、頑張ったのである。倒れ掛かったやけた柱も漸く火が衰え始めた。やや暫く、もう延焼の危険は去ったと思われたが未だ余燼が上がり炎は燃えている。今、心をゆるめ風向が変われば大変と疲れた体を自らはげましながら何回となくバケツの水を注ぎ込む。何時の間にか空はうす明るくなりかけて来た。時計を見たら四時過。一同、思わず顔を合わせお互いの敢闘を祝しながら先ず無事を喜び合った。小生もうれしかった。ご近所の人たちも来られ「四囲は全部焼けたが一軒丈残った、満願だ」と云って叫んでいる。皆敢闘したものの喜びの雄叫びだ。

この頃からどうしたものか寒さを覚える。一通りの寒さではない。悪寒だ。ガタガタふるえる。洋服も多少ぬれてはいるもののそんなに冷えている訳ではないのだが、皆に聞いて見ると皆が皆ふるえている。余り火の側で駆け回っていた反動であろう。焼け跡の火に遠くからあたりながら暖をとる。いつの間にか近所の火もすっかり下火になっている。見ると一面の焼け野原になっているので驚いた。まだ余煙と灰煙でよく見えぬがとにかく相当な被害らしい。一方、家の中は台所の焼夷弾消火の時、土足にて往来し、又、水をかけたので泥と水でぐちゃぐちゃ、畳の上にあがる訳にも行かぬ。然し焼け残ったのだ、この位はしかたないとあきらめる。腹が減ったので平常用意していた炒り米を食べる。みどりは御飯を炊く。焼け出された人の手前もあり余り仰々しくできぬのでこっそりとおにぎりを作る。小生もみどりと腹一杯、食べる。相当食い込んだ事と思いつつも、今、この時元気を出さねばと思いい遠慮無く頂戴した。お酒でもあれば大いに祝杯を上げる所だがそれどころではない。次の空襲にそなえて対策をねりつつ喜び合うのであった。

(次号に続く)

生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（後編）

岡本 和久

先月に続き、戦中・戦後の体験談を伺いました。痛感するのは、いかにわれわれがいる現在の環境が恵まれているかということです。このありがたい状況で、いかに「生き延びる力」を磨くのかというのは大きな課題です。せめて、あらゆることにチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思います。最後に島田知保さんに対談をさせていただきました。

鳥山百代さん

現在、83歳の鳥山さんは京城生れです。今はお孫さんたちに囲まれ、相変わらず活発に活動されています。しかし、まったく普通の「女の子」が体験した戦中と戦後は想像を絶するものでした。

初めて見る日本は緑がきれいだった

私は1928年(昭和3年)に京城、現在の京城(ソウル)で生まれて、今年で83歳になります。父は広島安芸吉田の農家の四男で、新天地を求めて韓国に行き、製麺業を始めました。当時、韓国は日本でしたからね。母は17歳で広島から京城へ行き、8歳年上の父と結婚したそうです。仕事が軌道に乗るまでは二人ともずいぶん必死に働いたようです。京城にあった三越にも麺を卸していたと聞いています。

私が終戦を迎えたのは17歳でしたが、それまでは実に満ち足りた生活を送っていました。百(もも)お嬢様と呼ばれて、使用人もたくさんいました。私が通った小学校は日本人だけで、明洞(ミョンドン)に近い南山という所にある学校でした。韓国の人たちともごく普通に付き合っていたと記憶しています。もちろん、日本人は支配する側でしたから、肉体労働などはせず、もっぱら韓国の人がするこのようなことはありましたけれどね。

警戒警報や空襲警報が時々鳴ったり、偵察機などが来たりしましたが、実際に爆撃されることはありませんでした。しかし、灯火管制はありましたし、家には細菌戦に備えて防毒マスクなどもありました。

私は五年制の高等女学校に通っていましたが、昭和20年、繰り上げ卒業といって4年生の私も5年生と一緒に卒業させられました。玉音放送のあった8月15日は、進学した女子専門学校の夏休みでしたので家にいたのですが、ラジオの電波の状態が悪く、「以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」というところしか聞こえませんでした。でも、なんとなく「敗けたんじゃないかな」ということはわかりました。

役人や知識人の中には敗戦の前に荷物を日本に送り、ご自身も日本に帰っているという人もいたようです。でも、私たち一般人は報道を信じ、ある意味洗脳されていましたから、呆然とするばかりでした。そうしているうちに韓国の人たちが「マンセー、マンセー」と町で騒ぎだしました。勝利を祝っていたのでしょう。

姉と私は何をされるかわからないというので、家の中に囲われてしまいました。押入れに抜け穴を造ったりしました。流言飛語が飛び交い、みんな警戒していました。外へ出ないので社会の様子はあまりわからなかったのですが、デマもかなりあったと思います。ソ連や満州まではある程度の距離があったので、比較的秩序だったのではないかと思います。



姉が徴用逃れで海軍関係の職場に勤めていました。幸いなことにその関係もあって、引き揚げ列車の切符が意外に早く手に入りました。とにかく住んでいる所が日本ではなくなってしまったので、そこには居られないのです。仏壇とか、神棚、おひな様などを庭で燃やしましたが、人形(ひとがた)のものを燃やすというのは忘れられない記憶ですね。

一人が持って帰れる荷物は手で持てる範囲に限られていました。私は大きなリュックサックを持ちましたが、母は喘息の真ん中の弟をおぶっていたのでリュックを持つことができません。一番下の弟は小学校低学年なので大きな荷物は持てず、本当に大事な物だけを持って帰るだけでした。写真はアルバムから剥がして持ち帰りました。

当時、かなりのおカネを出せば、闇ルートで荷物を運んでくれる「闇船」というのがありました。両親はそれで荷物を送ったのですが、帰国後、ずっと首を長くして待っていましたがとうとう届きませんでした。

帰国するまではやかんと飯盒、お米を持って歩いていました。釜山で20日間ぐらい引揚船を待ちましたが、その間は本当に難民でした。満州から逃げてきた軍人さんたちがかなりいたのですが、その人たちは身ひとつで逃げているので荷物がありません。それで頼むと持ってくれたのです。それは本当に助かりました。もちろん食べ物物の差し入れなどはないですから、みんな、自分で食べ物を調達していました。まあ、おカネを出せば買えたということでしょうね。

母はかなり不利な闇レートで日本円に交換をして、それを日本に持ち帰ろうとしました。おカネを持ち帰る方法については水筒の中に入れるとか、いろいろな話を聞きましたが、誰でも気づく方法はみんなバレてしまいます。船に乗る前に全員が身体検査をされるからです。女性の場合、韓国の女性が身体検査をしました。母は身体検査で見つからないようにするため、段ボールの波の部分を切ってそこにお札を入れ、糊で貼り直してトランクのような形にして持っていました。



幸い見つからずに持ち帰れた何万円かのおカネは、帰国後非常に役立ちました。当時のおカネで家が十分に建つ金額ぐらいありました。まだ戦時中の昭和17～18年ごろでしょうか、5000円を日本に送金してそれで田畑を買っておいたぐらいですから、数万円というのは大変な金額だったのです。

帰国後、その田畑で採れたもので、十分ではないけれど家族8人が芋粥で糊口をしのぐぐらいのことはできました。帰国した年もちょうど9月に帰ったので、現物で小作米が入りましたから、それは助かりました。

興安丸という船で日本に帰ったのですが、船に乗ったときに船員さんが「お帰りなさい、もう大丈夫ですよ」と言ってくれたことが本当にうれしかったです。安堵感、もう大丈夫だという思い、これは筆舌に尽くしがたいものでした。私たちは子どもでしたが、両親はもっとホッとしただろうと思います。一晩で玄界灘を越えて、山口県の仙崎の港に着きました。本当に緑がきれいだなと思ったのを覚えています。緑のなかに柿の実がなっていた。それが印象に残っています。

そして、驚いたのはさすがに緋(かすり)の着物で日本人女性が肉体労働をしている姿を見たことでした。それまでは肉体労働をするのは韓国の人で、日本人が働くのを見たことがなかったのです。「日本人がこんなに働いている」ということが驚きだったというのは、今から考えると恐ろしいことでもありますね。それから、日本にはどんな山間部に行っても立派な小学校がある、韓国では当時、小学校は義務教育はなかったと思いますので、日本での教育の普及ぶりがよくわかりました。

仙崎から下関まで貨物列車で移動、山陽本線で広島まで来ました。印象深かったのは徳山の海軍工廠が全滅していたことでした。そして、被爆後の広島に到着しましたが、そこは焼け野原。何にもない。福屋というデパートの残骸が見えるだけでした。放射能が出ているかもしれないというわさがあり、汽車に乗っているときは絶対に外に出てはだめだと言われました。

広島市の少し先の祖母の家で一泊しました。そのときに着物を脱いで、五右衛門風呂で着物を煮沸したのを覚えています。シラミを除去したのです。シラミがいっぱい体についていたのです。そのときに裏の山で大きな次郎柿がなっていました。なぜかはわかりませんが、娘心に日本中どこにいても柿があるというのが印象的だったようです。韓国では街中に住んでいましたからね。

韓国では親戚がほとんどいませんでしたから、日本に帰ってきて、親戚の子とはすぐに仲良くなりました。祖母が「やっぱり血のつながったものだろう」と言ったのも記憶に残っています。

最終的には父母のふるさとの吉田に着きました。父の兄が大八車を引っ張って迎えに来てくれ、「これからは荷物を背負わないでいい」と言われたのがとてもうれしかったです。それで祖母の本家の一部屋でお世話になることになりました。四畳半一間、そこに8人が寝起きしていました。隠居所でしたがお勝手などちゃんと独立して生活ができるようになっていました。冬はあんなに足を突っ込んで、みんなが放射線状になって寝ていました。

父は京城にいたときから呆然状態でした。すべてを失ってしまったのですから無理ありません。でも、先ほどお話したように、米だけは買っておいだ田畑で収穫がありました。しかし、牛を持っていません。肩身が狭いというか、牛を借りたら、何日分の労働力で返さなければならないのです。田植えは共同作業です。そのなかで牛を持っていないということではかにされる。だんだん、厄介者を抱え込んだということで祖母の立場が苦しくなる。気の毒だということで、姉は天津の東洋レーヨンに職を見つけて出ていきました。

私は広島女専への転校試験を受けて合格をしていました。しかし、親から「男の子が3人いるから、悪いけど女のあなたは進学をあきらめてくれ」と言われました。母は泣いて頼むのです。「それならどうして転校試験を受けさせたのだ」と思ったものです。一週間ぐらい泣きあかして、そして進学をあきらめました。

長男は学費のいらない師範学校に行き、卒業してから東京の江戸川区の学校の先生になりました。そのまま田舎にいても将来性がないですから、それを機に田畑を売ってみんなで東京に出てきました。それで家族全員で働き、下の弟は奨学金をもらって何とか家計が安定してきました。父母は子ども相手のお菓子屋を営みながら、つぼ焼き芋を売ったりして生活を支えていました。貧しいなかでも借金などはなく、質屋にもいかなかった。進学をあきらめた私は、健康保険組合で経理の仕事をしていました。みんな、とにかく必死に働きました。

今、私が一番感じるのは、教育の恐ろしさということです。私たちも言われるままに政府のいうことを信じていた。みんな、何の疑問もなく戦争の勝利を信じていた。良い面でも悪い面でも教育の力はすごいものがあります。総理大臣にはしっかりしてもらいたいですね(笑)。若い人には大所高所から世の中を見るような目を養ってほしい。そして、判断力のある人間になってほしいと思います。

私も娘たちを判断力のある人間になってもらいたいと思って育ててきました。私の子育ての基本でしたね。善悪、右にいくか、左にいくか、自分がどのような行動をしたらよいかというときに、判断する力を持ってもらいたいと思っていました。そのために学校にも行ってほしいし、経験も積んでほしい。私も子どもに的確なアドバイスができるような親になりたいといつも思っていました。成績がどうかとかいうことよりも、正しい判断ができるということの方がはるかに重要です。ひたすらそれを願っていました。

今の日本の教育は少し甘すぎるのではないのでしょうか。会津藩の「什(じゅう)の掟」に「ならぬことはならぬものです」という教えがありますが、駄目なものは駄目という教育が必要だと思います。若い人には「希望」を持ってほしい。私たちは何もなかったけれど無我夢中で働いてきた。そしていつもネガティブにならず、将来に夢を持って生きてきました。戦後のものすごいインフレのなかでも、とにかく希望を持ち続けてきた。おカネよりもモノの時代でした。だから今でもモノを捨てられない(笑)。給料がいくら上がっても追いつかない。おカネよりもお米のほうがありがたかった。そんな時代があったのです。でも、将来が明るかったですね。

今は豊かになりすぎたのかもしれませんが。一方で希望がなくなってきた。私が戦後、一番欲しかった物がミシンでした。それを得たときの喜びは忘れられません。今は満ち足りていてそのような喜びがなくなっているのかもしれませんがね。まあ、急に貧乏になれといっても難しいですけどね。

東日本大震災のとき、日本中の人たちが何とか自分も役に立ちたいと思ったでしょう。あの一瞬の気持ちを忘れないことです。モノは豊かになっても、心の豊かさはまだまだです。これからは心の豊かさに将来の明るさを求めていくべきだろうと思いますね。戦後、引揚者たちは一瞬にしてすべてを失いました。神戸の震災も、昨年の震災も多くの人があっという間に多くのものをなくしてしまいました。でも、何が起ころうとも身につけた腕や知識はなくなりません。ですから、若い人にはしっかりそのような生き延びるための力をつけておいて欲しいですね。

宮崎一幸さん

経済ジャーナリスト、インテリジェンス・ユー代表

東洋経済新報社に長く勤められた宮崎さんに、今回は母上の手記を提供していただき、また貴重なお話も伺わせていただきました。

私の父は島原の農家の出身でした。当時は5男坊、6男坊には相続する畑もなく、結局満州に行ったのだと思います。満州といっても近いですからね。東京に行くよりも、もっと簡単に行けました。父は、満州の学校で土木工学を学んだようでした。母は親戚の関係で満州に行き、父とは満州での見合い結婚だったようです。

私は昭和16年(1941年)2月に哈爾濱(ハルビン)で生まれ、5歳まで暮らしました。父は黒竜江の大きな仕事にかかわり、その支部長になっていました。当時は家と役所が一緒のようなもので、土地も3000坪ぐらいありました。

7月になると、もう秋の訪れで庭中にコスモスが咲く。そこに馬車で冬のオンドル用の材木を一日中運び込んでいた。そこで姉と砂遊びをしていたことを覚えています。満州人の使用人やロシア人のコックさんまでいました。

もうひとつ覚えているのは、のべつ宴会をしていたこと。料理屋などそんなにないですからね。うちには50人前ぐらいのお膳がありました。関東軍の人は宴会をするところがないので、うちに来ていたような感じでした。軍人さんは甘いものなどたくさん持っていた。ですから羊羹をくれたり、あめをくれたり、当時は珍しかったチョコレートをもったりしました。よく覚えていますよ。芸者さんもしょっちゅう家に来て、ど

んちゃん騒ぎをしていました。



宮崎一幸さんの母上、宮崎静江さんの手記より(以下、囲みはすべて)

北満の果て、国境の町、黒河(コッカ、現在・中国黒龍江省愛輝、アイホイ)。私達一家はこの静かな町に、二年余り住みついた。広大な黒竜江の対岸はロシアのブラゴエ(ブラゴベシチエンスク)で、時折小さな人影がみえる。ロシア牽制のためか黒河のネオンはいつも灯っている。七月末には一家揃って黒竜江の花火見物と酒落こんだ。昭和二十年八月十二日、冬物の整理もすんで、やれやれと一息ついて庭に目をやると東菊が咲き始めていた。掃除も念を入れて、明日あたり長崎のおばあちゃんを奉天まで見送りに行った夫も帰って来ると思い、部屋に東菊を活けておいた。「組長さん、集合してください。」との声に表に出る。

ロシアとの戦いが始まったので、屋までに冬物衣料と食料を持って学校に集合との事。さあ大変だ。持てる物だけでも何とかまとめ、夫が帰ってきててもすぐ送れるようにと、汗だくで片付ける。ご飯を炊かなくては、と思いながら外を見るともうぞろぞろと皆道を歩いて行く。「急がなくては」、と朝のご飯を握り、寒いときの用心に毛糸ものをいっぱい詰めて、一幸にも幸子にも持たせる。大切なものは一つにまとめ、着られるだけ(五・六枚)服を着込んで洋を背に二人の手を引いて、家の戸締りをしっかりして学校へ急いだ。

のどかで豊かな生活が、突然、一転しました。終戦になる前にソビエト軍が攻め込んで来たのです。攻めてくる前の晩、「どうもおかしい」というわきが立ちました。「逃げなければいけない」と話している前日、関東軍の人たちは「転勤になりました」と言ってみんな先に逃げてしまった。関東軍が使ってしまったので列車も自動車もないので、持っている荷物を馬車に乗せ、私たちも逃げ始めたのです。守ってくれるべき関東軍はいないのにソビエト軍は攻めてくる。仕方がないので父たちは民間人だけで手元の銃を集めて、山にこもったのです。母の言葉によれば「死に行くのだと思うより、まるで出張を送り出すような気分でサヨナラをした」と言っていました。

山にこもった父たちは、夜が明けたら周りをソビエトのタンクに取り囲まれていた。タンクと戦く方法など誰も知らない。一発も打たずに降伏したそうです。それでシベリアに連れて行かれてしまった。関東軍で逃げ遅れて捕まった人たちと一緒にされてしまったのです。国際法上は捕虜を労働には使ってはいけないのですが、関東軍司令部はそれを認めてしまった。数十万人です。シベリアは何もない。攻めてくるソビエト兵も多くは囚人兵でした。父などは土木技師でしたから、本来はシベリアで長期間働かせられる可能性が十分あった。しかし、みんな、それを黙っていてくれたので3年ぐらいで帰してもらえたそうです。

でも、その間が大変だった。隣で寝ている人が死ぬのがわかる。亡くなる前の晩にシラミが一斉にいなくなるのだそうです。体温が下がるのです。食べ物といっても黒パン一個ぐらいです。栄養失調になってボーツとしている。元気な人は弱っている人のパンを取ってしまう。取られた人は自分が食べたと思ってしまう。それぐらい意識がもうろうとしている。そして、そういう人は死んでいく。全体の3割ぐらいが亡くなられたと聞きました。零下40度か50度の土地ですからね。だから本当に便所のなかに落ちていたジャガイモの切れ端でも何でも食べたと言っていました。

モンゴル方面とシベリア方面の両方から攻められていた。開拓農民の方がたくさんいて、それは本当に悲劇でしたね。開拓農民の方は子どもが多い。「産めよ、増やせよ」で、子どもは労働力ですからね。

石の轍の馬車でゴトゴトと大草原を逃げました。秋ですから見渡す限り桔梗が咲いていました。そこに飛行機が来て銃撃をす。その間は草の中にもぐって隠れる。私は子どもで小さかったので、桔梗が人間の背の高さぐらいに感じられた。轍が桔梗の紫色に染まっていた。敵機が去るとまた馬車で移動する。ずっと後年まで桔梗の夢を見ましたね。そのあと無蓋貨車に乗って逃げました。そうすると敵は銃撃に来るんですね。私の前にいたお母さんが赤ちゃんを抱いておっぱいをあげていた。その人が銃撃でやられて血が私にバサツとかかった。すごかったですね。これもいつまでも夢に見ました。

「水が欲しい」と子ども達にせがまれても一滴の水も無い。まわらぬ口で洋がブーブーするので唾でも飲ませてやろうとするが、いくら努力しても口の中はカラカラで喉が引きつるだけ。隣の人の水筒にはまだ水が入っているだろうか？こんな時には「下さい」とも言えない、人の事より自分が大切なものだ。男の人がいてくれたらなあと思う。子どもが泣き、その体に巻き付けておいた着物も邪魔になり一枚一枚脱ぎ捨てた。腕に付けていた時計も取ってしまう。

何だか頭がボーとしてきた。思ってもいない事が口から出る。それがおかしくて笑う。他人が見たらまるで気違いだ。私の血筋には気違いの人はいない、などと考えるくらいだから気がおかしくなっていないと思うのだが。なんだか頭のゼンマイが切れてしまったようだ。こんな事が二日も続いたら本当に気が狂ってしまうかもしれない。

「さあ、降りるんだ」という声にハツとして目を開いた。どうしたのか何も見えない。真っ暗だ。「奥さん！私の肩につかまりなさい」と誰かに声を掛けられて、ようやく汽車から降りた。まるで高い船の上から飛び降りたような感覚だった。皆夜の線路上にへなへなと崩れ落ちる。もう歩けない。何しろ水が欲しい。まわりをキョロキョロしていると、これが本当に天の助けというのだろう。雨が降ってきた。大きな口を空に向けて、思い切り雨水を飲む。ようやく元の私に戻れた思いがした。喉が潤うと、皆起き上がって駅に向かった。まだ目元が少し引きつっている。

要するに、玉音放送も何もない。もう敗けたのはわかっていた。父は自分たちを守るために山にこもったまあいなくなってしまった。シベリアに連れて行かれたのですが、そんなことは残った家族にはわからない。死んだものか、あるいはシベリアか、そんなことはわからない。残された大人は女と年寄ばかりです。とにかく哈爾濱まで戻るのは大変だったのです。

やっと汽車に乗れたが、子ども達は網棚に乗せ、四人掛けの椅子に六人座り、間には二人が立ってどうにも身動きが取れない。汽車の中で隣の赤ちゃんが死んでいった。奥さんが大声で泣きわめく。同情しなければならぬと思いながら、無性に腹が立った。悲しいのは彼女だけではない、と口まででかかったが、ぐっと押さえた。家の洋も明日か明後日の命。洋はハシカにかかっていた。私はその時が来てもあんな様はしたくない、と心に言い聞かせた。

吟爾濱に早く着かないかと待っていたが、夜がきて空が明るくなってもまだ到着しなかった。死んでしまった赤ちゃんをおぶっていた人も、川の上から赤ちゃんを捨てた。ドボン、ドボンといくつもの音がする。捨てる人の顔も死人と同じ色だ。

哈爾濱に戻りましたが、元の日本人街を満州人が襲って来る。彼らは貧乏ですからね。それで何から何まで持って行ってしまう。身ぐるみはがれます。量から何からすべて持って行ってしまうのです。電気も来ていないのに電球まで持って行った。私は木でできたタンクのおもちゃを持っていたのですが、それを取られそうになってギヤーギヤー泣きました。そのせいか、そのおもちゃだけは取られずにすんだのを覚えています。

ソビエト兵がマンドリンの形をした拳銃を撃って中国人を追ひ払う。そのソビエト兵の腕を見ると、いくつもズラツと巻き上げた腕時計をしている。しかもその時計の時間がみんな違う。彼らは時計が読めないのですね。母は女性だとわかると危ないので、頭を丸坊主にして顔に墨を塗っていました。満州人の服を着て男のような格好をしていました。

いよいよ八月十五日。天皇のラジオ放送を聞く。泣く人もいたが、私は泣けなかった。負けるという事はうすうす感じていた。負けたのだ。仕様が無い。泣く気力も無いのかもしれない。明日がどうなる事か、考えも付かない。

玉子でも茹でて食べようかと勝手口から外をのぞくと、幾十人もの満人がワイワイ言いながら品物を持ち出している。何が始まったのだらうかと思っている間に、こちらにもやって来る。ワーワーと叫びながら箆、戸棚、雨戸までありとあらゆる物が、大水に流されたように無くなった。恐ろしくて押入れに入り中から戸をしっかりと握っていた。青龍刀を持った者、鎌を振り上げる者、黒く脂ぎって、映画に出てくるそのままの顔をしてわめいている。今までの怨みを晴らそうと何から何まで片端から持って行ってしまう。暴動とはこういうものなのだろう。何も無くなってしまった。

ついには私達も引っぱり出される。Mさんが裸にされ、女はシミーズ一枚にされる。一幸にも手が伸びた。外を見るとロシアの兵隊が銃を構えて立っていた。「助けて」と大声をあげてロシア兵の後ろに隠れた。訳の分からぬ大声に満人たちはビクビクして、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。その隙に私達も逃げた。

中国の、特に北満の人は文盲が多かったのです。日本人はほとんどが字を読める。彼らは、明らかに日本人は自分たちとは資質が違ふと思ったのでしょう。それで、日本人の子どもをくれて言ってくる。しかし、男は仇討などする恐れがある。女の子は頭がよく、労働力になり言うことを聞く。小学校1年ぐらいの子がずいぶん中国人にもらわれていきました。それが中国残留孤児になったわけです。よく子どもを捨ててきたというような言いかたをされますが、実は、そのままいけばみんな死ぬと思っていた。そこに中国人が来てまんじゅう20個で子どもをくれという。中国人にあげた子どもは確実に生き延びられる。そして、まんじゅう20個で残った子どもたちが飢えずにすむ。だから名札を着物に縫い付けたりして中国人に子どもをあげた。だからこそ、戦後、「実は私が親です」と言って手を挙げづらくなってしまったのです。本当に壮絶ですよ。

二～三百人の満人がやって来て私達を一箇所に集め、ぐるりと周りを取り囲み、持っている物を出せと脅迫する。娘をくれと、手を引っ張る。取られたら大変！向こうとこっちで互いに手を引っ張り合う。娘が大声で泣き叫ぶ。泣いたので助かった。まったく日本人もこうなると哀れなものだ。

一人去り、二人去りして、夕方になってようやく家に入れた。中支那北安は昔、共産匪が農民になった所なので何をするかわからない。支部の会議室に女子どもを真ん中に、男の人達が周りを囲む。「ピストルが五丁有るので、いざという時は覚悟してください」と言われる。「私もお願いします」と頼んだ。

終戦二日後の8月17日、北安の学校に收容されました。ひとつの教室に60～70人が詰め込まれ、頭と足を互い違いにして寝る状態でした。夜中にトイレに行くと、もう入る場所がない。夜もロシアの兵隊が女を探しにきます。明るくなると今度は時計をあさりに来る。3000人の共同生活でした。学校の校庭では、満人が昨日、略奪したものを市に出して売っている。

八月の暑さに身動きが出来ない生活で毎日病人が出る。はしかがはやり始め、2～3歳の子どもが櫛の歯が欠けるようにバタバタと死んでいく。病院の先生はいても薬は無い。長い二ヶ月だった。

何しろ便所に行くにも男の人の監視がないと安心して行けない。長い穴の上にコモがまいてあるだけの便所に二十人もの人が前の人のお尻を見ながら用を足す。一部が済むと「ハイ」と監視の手が挙がり、後の人がサッと跳んでくる。連れて行かれては大変なので、兵隊が来る前に用を足さなくてはならない。女の人は顔をわざと黒い泥を塗り付けて、お互いに見られた様ではない。それでも、黒いクーリーの服を着、真っ黒い顔をしていてもやはり自分は女だと思っているらしい。

小便の臭いなどで息が切れそうな汽車に詰め込まれ、哈爾濱を通り、2年前まで住んでいた新京にたどり着きました。平和な毎日を過ごした新京は、どこも暴動にやられ荒れ果てていました。そこで弟が亡くなりました。

家がロシア人に乱入されたので抱いて逃げているうちに、気が付くと洋が冷たくなっていた。この子は手が掛からない子で、2時間でも遊んでいた。こんな事になるのなら、昨年哈爾濱まで行って痛い思いをするトラフオームの手術などしてやるのではなかった。かわいそうに思う一方、親孝行の為に死んでくれたのかとも思った。小さい子ども3人を連れていた私はさすがに疲れていたからだ。近所の坊さんと呼ばひ、児玉公園の生前仲のよかったMさんの子どものお墓の隣に埋めた。辺りは日本人の墓標でビッチリ、何千人埋めてあることか。

翌日、花を持ってお墓参りに行って驚いた。「犬と日本人、入るべからず！」と大書してあり、すっかりローラーで地ならししてあった。戦に負けた者の悔しさが胸に込み上げてくる。可愛そうな洋、きりも無く湧き出る涙をどうすることも出来なかった。



とにかく葫蘆島(コロトウ)の收容所までたどり着き、そこから博多まで逃げてきました。私は哈爾濱に戻ったところから本当に何も覚えていないのです。記憶がなぜか欠落している。次に記憶に残っているのが引揚船でした。上陸前に赤痢が発生して20日間、船に足止めを食わされました。いよいよ明日、上陸というので最後のお米を炊こうと置いておいた。そうしたらそれを盗まれてしまった。そんなこともありました。

上陸すると頭からDDTを浴びせかけられた。そして、自分の顔ぐらいあるお赤飯のおにぎりがもらえた。母は子どもが食べ残すのを期待していたのですが、みんな食べてしまった。

島原の父の実家に2～3カ月いて、その後、母の姉のいた千葉の大原、房総半島の先っぽですね、そこに転がり込んだのです。私もそこで小学校1年に入りました。大原は米も取れる。地味がそれほどよくないけれど野菜もできる。そして、魚は豊富です。ですから、ひもじい思いはなかったですね。その子どもたちはみんな太っているのに、こっちはガリガリ。よくいじめられましたよ。母は私たちをそこに預けて豊橋に就職していました。縫い物の仕事でした。その後、父がムーンフェースの真ん丸な顔になって帰ってきました。それであまり父には向いているとは思えない食料品屋を大宮で始めました。頑固な商売をしていましたね(笑)。貧乏でしたが食べ物には苦労しませんでした。

まあ、極限状態を体験したことで「どうせ一回は死んでるわ」という気持ちはありますね。それとね、ドリス・デイが歌っていた「ケ・セラ・セラ」の気持ちですね。あ、それから、1929年のミュージカル、「回転木馬」のなかに「You never walk alone(君は決して一人で歩かない)」という歌があります。エルビス・プレスリーも歌っています。

嵐の中を歩くときもあなたは一人ではない
嵐の向こうには輝く大空がありひばりの歌声が聞こえる
だから顎を引き締めて真正面から向かって行け

というような歌です。酔っぱらうとよく歌いながら家に帰ります。この歌の歌詞も好きですね。

若い人へのメッセージ？ そう、今の人はあきらめるのが早いですね。人間、極限状態になると「できない」と思っていたことが「できる」方にスイッチが入ります。卑近な例でいえば、いくら練習してもできなかった鉄棒の逆上がりが必死に練習しているとできるようになり、あとはずっとできるようになる。もうだめだと思ったところでようやく能力のスイッチが入る。ですから、あきらめるのが早いといつまでたっても本来の力が出てこない。

ちょっと優秀な子には、「お前ら、そんなにエリートじゃないよ」と言いたいですね。世界のエリートはもっとすごい。格差社会というのは自分たちが作っているのです。偏差値が低いとそれだけで自分をダメだと思ってしまう。あきらめてしまう。逆に偏差値が高いからといって、そのことだけで優秀だともいえない。勝手に自分たちがそう思って、自分たちで格差を作っている。その格差によって自分の成果が裏切られると思うとガクッとくるんですね。格差を作るのに加担するなと言いたいですね。

後記にかえて対談：島田知保さんx岡本和久

岡本 8月は終戦記念日です。戦中・戦後を生きぬいた方々も数が減っています。極限的な状況を体験した方々の体験は、ある意味われわれの持っている貴重な資産です。その体験が風化しないように、消えてなくならないように文章の形にしておくことも意義があると思い、2回に分けて特集を組むことにしました。もちろん、とてもありがたいことなのですが、われわれはあまりに長く平和で安楽な生活が続いてきたために、それを普通だと思うようになってしまった。そして、「苦しい」とか、「大変だ」という基準がすごく低くなってしまい、ちょっとしたことで「もうダメだ」と思うようになってしまった。そんな気がするんですが。

「国」と「国防」を考える

島田 確かにそんな気はしますね。

岡本 私は1946年、終戦の翌年に生まれました。先月号で紹介した父の手記にもあったように、私の生家の台所の床には大きく焼け焦げた跡があったのを覚えています。また、家に砲弾や鉄兜があり、近所の東京工業大学には防空壕がたくさん残っていました。庭に掘った防空壕は小さな池になっていました。もちろん貧しかったし、粗末な服で学校に通い、決しておいしいとはいえない脱脂粉乳とコッペパンの給食で育ちました。しかし、まあ、そこを原点としてみればずっと平和が続いて経済が発展し、成熟し、それなりに豊かな国ができました。

しかし、一方で国防面での安全などは極めて意識が薄くなってしまっている。みんな、生活の安全・安心にはとても敏感なのにね。国防はアメリカ任せのようになってしまった。一方のアメリカは戦後もずっとどこかで紛争に巻き込まれている。60年代の中ごろ、私がアメリカの大学に行ったころは本当にベトナム戦争が激化しつつあるときでした。しかも、国民皆兵制です。ルームメートが18歳の誕生日に徴兵局に登録に行ったのをよく覚えています。成績の悪い順にベトナムに飛ばされるといううわさがまことしやかに流れていました。徴兵制はなくなっても、アメリカはずっと戦争と隣り合わせの暮らしをしていたんです。しかし、日本にはこれが完全に抜け落ちている気がします。決して、戦争がよいと言っているわけではないですが、緊張感というか、危機感は絶対に必要です。

島田 国防に対する考え方はいろいろあると思います。でも、われわれの生活は決して戦争とかかわりがないのではなかった。ずっと米軍基地はあったわけですね。私の大学は外国人も多かったし、そのなかには基地の人たちもたくさんいました。でも、正直言うとやはり彼らが持ち込む習慣というか、行動は受け入れられないものも多かった。ドラッグとか、人身売買とかですね。韓国は徴兵制がありますが、やはり、家族や友達と隔離されて人間性を捨てる訓練を受けるというのは人道的にもよくないと思います。

- 岡本 | 確かに戦争することは決してよいことではありません。でも、われわれ、自立が大切といっている最後の最後にはやはり国の保護の下に入っている。日本国のパスポートがあるから世界中、ほとんどの国に自由に行けるのです。もし、パスポートがなく海外に放り出されれば、その人がどうなっても誰も守ってくれない。その一番基本的な生存を確保する部分で、国というのはまだ現在の世界では重要なのです。ですから、国というものが消滅するということの恐ろしさをわれわれは忘れていると思うんです。玉音放送のあと、「もう、日本はなくなったのよ」とお母さんが子どもたちに告げる上田卓さんのお話がありましたが、これは本当に胸にグサッと突き刺さる言葉でしたね。
- 島田 | 国の存在はものすごく大きな保障ですよ。今は、国が守ってくれていることが当たり前のようになっている。もともと国境は人間が引いた境界で、時代によって変化するもの。どんな国もいつかは消えてなくなる。戦争で国を守るにしろ、非暴力で国を守るにしろ、相当の覚悟が必要です。スポーツのときとか、不満のはけ口としては、国が意識にのぼってくるけれど、国を守るために自分がどうするかということはほとんどの人は考えていない。
- 岡本 | 国が守ってくれるのが当然と思うのと同じように、平和も当然という前提でわれわれの生活が成り立っています。本当は平和ではなくても、平和を直視しない状態といったほうがいいかもしれませんけれどね。
- 島田 | 自分たちで自分たちの国を守るという、意志のある国とない国では社会の組み立てからがかなり違ってくるように思います。国を守るという意志を浸透させる際に、ボトムアップか、トップダウンかという違いがあると思いますが、私は今の日本では、やはり国民一人ずつの意識を高めるボトムアップ方式の方がいいのではないかと考えています。個人がしっかりしてくることで国という器もしっかりしてくるのかなと思うんです。
- 今回、記事を読んでいて、実は現在の状態は戦後と似た部分があるのではないかなと感じました。東日本大震災後の日本と戦後の日本。戦後の日本には焼け野原から立ち上がろうという、ある意味希望があった。でも今は、みんなちょっと疑心暗鬼になっている。国も方向性を示せないでいる。そのようななかでみんながつながってきているという面もあると思うんですよ。

「戦後」と「3.11後」の違い

- 岡本 | 3.11と戦後の違いで一番大きいのは、戦後のときは今後の方向性を示してくれる、というか押し付けてくれる存在があったということでしょう。アメリカというね。「これからこういう風にやらなければいけないだよ」と針路を教えてくれた。功罪ともにあるとは思いますが道筋をつけられた。3.11ではそれが無い。
- 島田 | ビジョンが見えない。本当はわれわれ個人がビジョンを示さなければいけないんですけどね。誰かがグランド・デザインを描いてくれるのを、口を開けて待っている。
- 岡本 | なぜ、そうなっているかというとやはり戦後のグランド・デザインも人に描いてもらったものだからでしょう。与えられることに国民が慣れてしまっている。
- 島田 | かなりいろいろとキーワードは出てきています。持続可能な社会とか、地球規模での共存とか。それらのキーワードが経済や国家、あるいはわれわれの腑抜けた楽観主義のなかでうまくかみ合っていないことがあります。
- 岡本 | 「そんなのきれいごとだよ」とか「現実の社会ではそんなのうまくいかない」という既成観念で打ち消されてしまう。国家レベルでも、企業レベルでも、個人レベルでもキーワードが単なる概念で終わってしまっている。エクセキューションがないんですよ。政府が悪いのかといえばそれまでですが、でも、その政府を選んでいるのは国民ですからね。
- 島田 | 何かあるとみんな政局になってしまう。虚しいですよ。
- 岡本 | 希望が持てるのは、東北の悲惨な状態のなかから戦後を生きぬいたような力を持った強い人たちが出てくることだろうと思います。将来の日本のリーダーとなる人が、今回被災された若い方からたくさん出てくるでしょう。それを期待したいですね。

- 島田 | 戦中・戦後の厳しい状態のなか、歯を食いしばって生きてきた人たちがいて、その結果私たちが今こういう暮らしができています。安心な暮らしを謳歌するばかりでこのときに何もしなければ、前の世代の遺産を食いつぶすだけです。少し長い歴史感を持って自分たちの今を見てみると、これからの生き方や経済の見方なども変わってくるかもしれない。若い人にはぜひ、それをやって欲しいですね。
- 岡本 | 難しいのは、苦難が強い人間を生み出すとしても、今のこの豊かな日本が現実にあるわけで、急に「貧乏になれ」と言われても無理な話です。それではどうしたらいいのか、それが今回いろいろな方取材して常に頭から離れなかった疑問でした。それで思うのですが、今、円高が進んでいるのは、ある意味日本の産業のグローバル化の遅れが引き起こしている面があります。もっと多くの企業が海外生産を増やし、生産拠点を新興国や発展途上国に移せば円高は止まるでしょう。でも、当然の結果として国内に雇用機会が減り、仕事を求めて遅れた国に出ていく人も増えます。その人たちは戦後の日本ほどではないでしょうが、やはり、貧しい生活がどんなものか、そのなかでどうしたら生き延びていけるのかということを学んでいくでしょう。これもひとつ経済の神様が与えてくれている試練なのかな、などとも思います。

「過保護」が「生き延びる力」を奪う

- 島田 | 80年代、90年代にはまだ若い人たちがそういうところに行こうとしていたんですね。その非日常的な生活がひとつのエンターテインメントだったということはあっても、彼らが今、NGOやNPOで活躍しているという事実もあります。わざわざ外国なんか行きたくないということを聞くと、ちょっと大丈夫かなと心配になりますよね。
- 岡本 | 私は70年代の初めにブラジルのサンパウロで勤務したことがあります。当時のブラジルは今と違ってまさに発展途上国でした。バスに乗ればノミ・シラミがつく。町にはスリ・かっぱらいがいつも狙っている。私が駐在した2年間、わが家には電話がありませんでした。ブラジルの高層ビル35階にオフィスがありましたが、そのビルが火事になったことがあります。屋上に避難して消火を待ったのですが、あとで考えると危なかった。ちょうど、「タワーリング・インフェルノ」という映画が上映されているところでした。まあ、かなりの低開発国での生活でしたが、ブラジルで生活した経験は本当に人生で役にたっています。
- 島田 | 私も80年代、バックパックで世界のさまざまな場所に行ったのは貴重な経験でした。モノがなくても人間は生活ができるとか、日本が安全の代償で何を失っているとか、いろいろな発見がありました。安全ではないところでも人間は生きているんですよ。
- 岡本 | そう、安全じゃないから生き延びる力が出てくる。
- 島田 | 日本はあまりに過保護ですよ。電車降りるときに忘れ物の心配までしてくれる(笑)。
- 岡本 | ホームでは電車が来るので黄色い線の内側に下がれとか……(笑)。
- 島田 | アメリカのグランドキャニオンでは、一目見て落ちれば死ぬとわかるところには柵がない。そういう意味では二重、三重に安全網をめぐらせてくれることで自分の頭を使わない、自分の危機に対する感覚を使わないということになっている。
- 岡本 | 動物的な生命力というか、サバイバル力がひ弱になっていますよね。
- 島田 | もう一つは教育の問題です。学芸会で主人公のお姫様が5人も6人もいるというおかしな現象がありますね。徒競走で全員が一着とか。本当は社会のなかで自分の能力を相対化して考えることを止めてしまっているのです。みんな気位は高いけれど謙虚さが無い。
- 岡本 | 規格大量生産は工業製品だけでなく、子どももそうです。ですから、ちょっと人と違うと、欠陥品としていじめの対象になる。昔、足の遅い子は「くやしかったら勉強でこい」などうそぶいていた。そんなしづとさが欲しい。

- 島田 | ファッション雑誌で同じものを売りつけようとしているのに、キャッチフレーズが「わたし流」だったり「自分流」だったりする。これ自己矛盾ですよ。ある意味、消費文化に絡め捕られた箱庭のような文化になっている。だから、30～40代になって突然、仕事を辞めて「自分探しの旅」に出たりする。「自分」は仕事をするなかで探していくものです。
- 岡本 | 本当にそうです。どこかの場所に「自分」が落ちているのではない。自分のなかにしか自分はいないんだから。角界に「欲しいものは全部、土俵に埋まっている」という言葉があるそうですが、欲しいもの、自分も全部、仕事という土俵に埋まっている。必死にそれを掘り出せばいいんです。
- 島田 | もうひとつ顕著なのが資格収集ですね。いろんな資格を取って安心したり、成功した人の書いた本を読んでそれを真似ようとしたり……。
- 岡本 | 3時間でわかるナントカみたいな(笑)。
- 島田 | そんなことで成功できるならみんな成功していますよ。解答がないのが人生です。でも、何かを習おう、教えてもらおうとする。
- 岡本 | 学ぶのはよいことだけど、近道、早道、楽な道を教えてもらいたがる。長期投資でのんびりやっていけばいいのに、みんなすぐに儲かる短期投資の方法を知りたがる。何かうまい方法があるはずだと思っている。
- 島田 | あるいは貯金しているから大丈夫という人や、将来の生活を考えるのが不安だから考えないという人もいる。でも、比較的豊かだとか、日本が安全だとかいう状態はあまり長くは続かないかもしれない。もっと切迫感を持ったほうがいいと思いますね。

「安全」の意味とは

- 岡本 | だからね、震災や原発の例でもわかりますが、何が起こるかわからない。もしかしたら隣の国が突然日本を攻めてくるかもしれない。たぶん、起こらないだろうけれど、絶対にないとはいえない事象に対して、もちろん国としての対策は必要ですが、同時に個人のレベルでも「万一」の場合にどうするかということは少しだけでも考えておく必要がある。それを国が何とかしてくれるだろうと丸投げするのは間違いですよ。「座して死を待つのは嫌だ」と思うなら「いざ」というときの備えを自分で考えておくことです。それが選挙での投票行動で表現されたり、自分年金づくりになったり、あるいは海外に口座を持って資産の安全を図るというようなことになるのではないのでしょうか。
- 島田 | アジアの人って金(きん)を身に着けているじゃないですか。何かのときに着の身着のままでも金だけは残る。そういう緊張感が日本にはあまりないですね。
- 岡本 | オスプレーの配備が問題になっています。私はオスプレーが最適な機種かどうか、それが本当に戦略的に必要なかはわかりませんが、少なくともアメリカは「安全」のために配備を考えている。日本の反対派は「安全」の面でNOと言っている。同じ「安全」でも全然意味が違う。
- 島田 | そうですよ。もし、NOならそれに対してどのような対案があるかという点が抜けている。東日本大震災のような悲劇も、日本では結構風化が早い。原爆を広島と長崎に落とされたのに、すぐに「アメリカ大好き」になってしまう。最近の若い子は原爆を落とされたといっても「間違って落としてしまった」ぐらいにしか理解していない。だいたい、日本とアメリカが戦争していたことだって知らない。
- 岡本 | つい、60数年前のことが遠い歴史上の事件になってしまっている。保元の乱や応仁の乱とはいわないけれど、少なくとも、日清・日露・第一次対戦と並列になってしまっている。それとともにその極限状態における体験も失われつつある。極限状態で得た生き延びる力も伝わらなくなっている。それは日本としては本当にもったいない。それゆえ、この企画には意義があると思ったのです。
- 島田 | のんびりとしていても、いつ、戦争が起こるかなんてわからない。特に今のような経済環境ですとね。私は、よく「今の日本はワイマールだ」と言っているんです。他力本願のままでいると、忘れたころに災難がやって来る。声の大きい先導者が出てきてみんながあおられる。方向を示してくれてみんながその方向に向かって走り出す。

今回の聞き取り取材で感じたことをまとめておきましょう。一つは戦中・戦後の極限状態は決して過去のものではなく、これからだっていつ起こっても不思議ではないということです。東日本大震災はそれを思い出させてくれました。この点はとにかく忘れないでほしい。そして、そのようなときにでも耐えられるように平和ななかでも「生き延びる力」を養っておいて欲しい。極限状態を体験するのは難しくても、たとえば必死に仕事をする、発展途上国で何年か仕事をしてみるというのもいいと思います。また、真摯に東北の復興活動に参加してみる。少なくとも極限状態の疑似体験をしてみるとことは意義があると思います。

そして、最後に「いざ」というときに生き延びられるように心構えを持つこと。もちろん、個人として、自分を守るための手段を講じることは当然です。しかし、それには限界がある。やはり、国というものの存在は大きいのです。ですから、個人、生活者として少しでも国や企業がよくなるような働きかけを続けていくことが非常に重要なのではないかと感じます。多くの方が戦中・戦後の体験をあまりお話になりたがりません。今回、取材に応じていただいた上田さんご兄妹、田中さん、鳥山さん、宮崎さんに深く感謝したいと思います。



I-OWA マンスリー・セミナー講演より バリュー平均法～フォローアップ

講演: 岡本 和久
レポーター: 赤堀 薫里

2014年5月に『自分でやさしく殖やせる確定拠出年金最良の運用術』という本を出版させていただきました。この本の中で、バリュー平均法について初めて紹介したのですが、おかげさまで多くの方に興味を持っていただくことができました。実際に試しているブロガーさんもいらっしゃいます。このマンスリー・セミナーでも昨年6月にバリュー平均法の話をしたことが、今日は追加検証をしたことについてお話をします。

これから、数年にわたり投資環境が厳しく、変動の大きい時期になるでしょう。全体的に金利水準が低下している為、証券市場のリターンも相対的に低下してきています。そのような中でも大きなリスクを取らずに、リターンをアップできる方法がいろいろ考えられます。第一にアセット・ロケーション。つまり、確定拠出年金制度などの非課税効果を上手く使うアセット・ロケーションがあげられます。これは税金というコストを削減する非常に有効な方法です。また、2番目に、ただ単にコアを持つだけではなくて、サテライト・ポートフォリオを持ち、少しだけアクティブな要素を入れることが考えられます。3番目に買い付け方法も、一般に普及しているドル・コスト平均法より少し進化したバリュー平均法を活用する。ほかにもあるかも知れませんが主なものとしてはこんなところですよ。

資産運用は、長期投資と異なり、金融資産全体をどうやって安定的に増やしていくのかということが目的です。ある銘柄を投資して10万円が100万円になったとしましょう。これは長期投資としては大成功です。しかし、これで退職後の生活が安泰になるとは言えません。つまり、資産運用は個別銘柄の損益よりも、資産全体の、ポートフォリオとしての価値の変動が重要なのです。



その為に一番必要なのがコア・ポートフォリオです。まずは株式と債券の間の配分比率を、ライフステージなどに照らし合わせて決めること。資産運用の第一歩を踏み出す方は、株式の部分として、全世界の株式インデックス投信を買っておけばいいでしょう。債券は現状、世界的に金利が低



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

いので、比較的短期のものを買っておくというのがポイントです。よく金利上昇時の債券はよくないと言われますが、必ずしもそうとも言えないのです。金利上昇過程においては短期債の利払いは償還が来れば、高い金利で再投資することができます。必ずしも金利上昇時は全ての債券が駄目だと言うわけではありません。

コアの第一歩を踏み出す人には、株式や債券を組み入れた投資信託を、ドル・コスト平均法で積み立てていけばいいでしょう。そうすることで、値段が安い時は口数がたくさん買え、値段が高い時は口数が少なくなるので、これを続けることで、比較的低コストのポートフォリオを構築できます。このドル・コスト平均法を一步進めたものがバリュー平均法です。

バリュー平均法は、米国のマイケル・エデルソン氏が考案した積立投資の手法です。1988年にアメリカ個人投資家協会が発刊している学会誌にバリュー平均法に関する論文を発表しました。そして、1991年、『バリュー平均法～より高いリターンのための安全かつ簡単な戦略』と題する書籍を出版しています。出版後、様々な人がコメントを寄せました。その中で、米国における資産運用業界の大御所、ウィリアム・J・バーンスタインは、「バリュー平均法の威力は、ドル・コスト平均法とポートフォリオのリバランスという、それぞれ効果が証明されている二つの異なるテクニックを合体したことから生ずるものだ。ドル・コスト平均法は、定時定額投資を行うことで、投資家は価格が安い時には大きい口数を、高い時には少ない口数を買うことができるという手法である。一方リバランスは、比較的熟成したポートフォリオに用いられる手法である。ポートフォリオの配分比率が基本構成から大きく乖離した時に値上がりしたものを売り、値下がりしたものを買うという行動により、投資家が安く買い高く売るといふ、適切なトレードを可能とするものである。マイク(エデルソン氏)が天才的なのは、これら二つの異なるテクニックを、ポートフォリオ構築の局面でひとつの戦略として使えるようにした点である。つまり、価格が安い時により多くの株数を買うのみでなく、価格が安い時にはより多くの資金を投入し、高い時には少ない金額を投資することによって、より健全な長期的成果を得られるのである」と、実にバリュー平均法の実態をよく理解したコメントを出しています。

この手法では時価で算出した資産額の目標を設定します。この目標額がバリュー経路です。そして、毎期の価格で計算した時価と目標額の差を投資していくのです。その結果、株価が安い時には大きい金額を、高い時には少ない金額を投資することになります。さらに価格が高騰し目標額を上回る場合にはその過剰な部分を売却します。これがドル・コスト平均法とバリュー平均法の違いです。

大変、効果的な手法なのですが、問題もあります。例えば長期にわたって価格の下落が続く場合には必要積立額がどんどん増加してしまい、場合によってはそれが生活資金を圧迫することもありうるという問題があります。また、長期に上昇が続く場合には必要積立額が減少していくことになるのでいつまでたってもポートフォリオ構築のプロセスが完了しないという問題もあります。また、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

売却のケースもあるので課税口座で運用しているのであれば譲渡課税が課されるケースもできます。これらの問題に対処する方法として売却なしのバリュート平均法、積立額に CAP や FLOOR を付けた場合などのシミュレーションが、今回の講演では紹介されました。概して効果は制約なしのバリュート平均法よりも若干劣ることがあってもある程度、この手法の特性は活かせることが理解できました。特に CAP 付の場合は、現在の生活費としての支出と、退職後の生活費のための投資のバランスを取るためにもとても現実的であり、また、バリュート平均法の効果もそれほど薄まらない良い方法ではないかと思いました。

<モデルポートフォリオ:2015年7月末の運用状況>

単位: %

		トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の 投資額に対する騰落率			
		1ヵ月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月 ~ 187万円
4資産型	積極型	2.25	24.62	16.59	6.41	16.83	11.12	69.69	73.10	89.14
	成長型	1.86	18.20	12.66	5.55	11.90	7.81	49.67	55.20	71.63
	安定型	1.47	12.01	8.70	4.46	7.47	4.58	31.97	38.41	53.83
2資産型	積極型	2.08	21.81	16.98	7.27	18.97	8.26	68.10	78.43	102.61
	成長型	1.95	17.77	13.61	6.34	13.97	6.46	52.45	61.74	84.95
	安定型	1.82	13.79	10.18	5.17	9.59	4.66	38.16	45.61	66.35

* 投資にかかるコストは控除していない。積み立ては、税引き前分配金再投資。ポートフォリオは毎月リバランスをしたものとする。

積み立ては計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2014年7月末に1万円投資資金を積み立て始め、

2015年6月末の投資資金までとする(2015年7月末積み立て分は運用期間がないため含めていない)。

出所: イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがMorningstar Directにより作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール(<https://www.matonavi.jp/inquiry>)にてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンまで。

ポートフォリオの資産配分比率(外貨建て資産は円換算ベース)

		国内株式: TOPIX	外国株式: MSCI KOKUSAI	国内債券: NOMURA- BPI (総合)	外国債券: Citi WGBI (除く日本)
4資産型	積極型	40%	40%	10%	10%
	成長型	25%	25%	25%	25%
	安定型	10%	10%	40%	40%
2資産型		世界株式: MSCI ACWI (含む日本)		世界債券: Citi WGBI (含む日本)	
	積極型	80%		20%	
	成長型	50%		50%	
	安定型	20%		80%	

ポートフォリオは「インベストラ이프」が参考のために考案した資産配分に基づき、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出しています。
特定の資産配分による投資の推奨を行うものではありません。

「長期投資仲間」通信『インベストラ이프』のその他の記事はこちらからご覧ください。
<http://www.investlife.jp/>

4資産

■ 国内株式:
TOPIX

■ 外国株式:
MSCI KOKUSAI

■ 国内債券:
NOMURA-BPI
(総合)

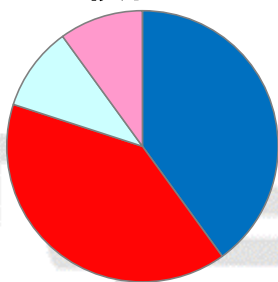
■ 外国債券:
Citi WGBI
(除く日本)

2資産型

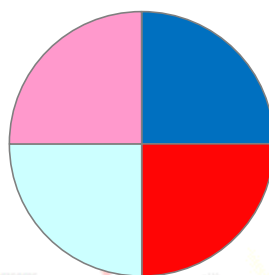
■ 世界株式:
MSCI ACWI
(含む日本)

■ 世界債券:
Citi WGBI
(含む日本)

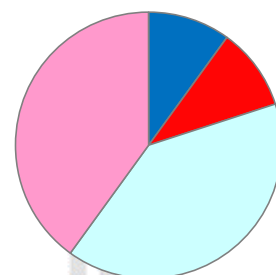
積極型



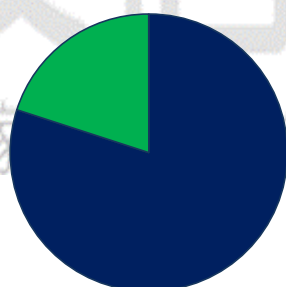
成長型



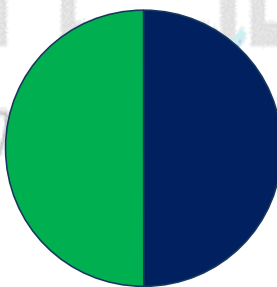
安定型



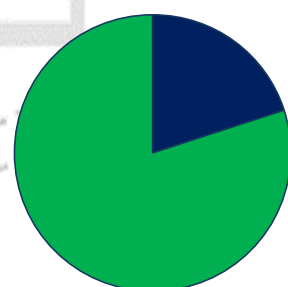
積極型



成長型



安定型



<国内で購入可能な代表的ETF:2015年7月末の運用状況>

当資料は「インベストラ이프」のために、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出、作成しています。特定の投資信託による投資の推奨を行うものではありません。※ファンド名をクリックするとそのファンドの詳細を見ることができます。

「長期投資仲間」運用「インベストラ이프」のその他の記事はこちらをご覧ください。http://www.investlife.jp/

* 投信ブログ [「梅屋敷商店街のランダムウォーカー\(インデックス投資実践記\)」](#) の管理人、水瀬ケンイチさんのご協力で銘柄を選定しました。
 なお、国内株式、債券、コモディティについては [インベストラ이프](#) が選定しました。

Ticker	ファンド名	トータルリターン (米ドル換算)					トータルリターン (円換算)					リスク (円換算)	リスク (米ドル換算)	1万円ずつ積み立てた場合の 投資額に対する騰落率				1万円ずつ積み立てた場合の 月末資産額				純資産 2015年7月末		総経費率 または 信託報酬 (%)	イボットソン 分 類	連動を目指す 投資対象指数
		1ヵ月	1年	5年 (年率)	7年 (年率)	10年 (年率)	1ヵ月	1年	5年 (年率)	7年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	1年 12万円	5年 60万円	7年 84万円	10年 120万円	1年 12万円	5年 60万円	7年 84万円	10年 120万円	百万ドル	億円			
1308	上場インデックスファンドTOPIX (日興AM)	0.53	8.69	8.60	3.50	4.05	1.78	30.95	16.64	5.54	5.10	20.20	15.99	16.19	78.86	86.43	68.29	13.94	107.32	156.60	201.94	10,650	13,195	0.10	国内株式・ 大型ブレンド型	TOPIX(配当込み)
1348	MAXIS トピックス上場投信 (三菱UFJ投信)	0.53	8.68	8.59	-	-	1.78	30.93	16.64	-	-	-	-	16.18	78.80	-	-	13.94	107.28	-	-	3,177	3,936	0.08	国内株式・ 大型ブレンド型	TOPIX(配当込み)
1554	上場インデックスファンド世界株式 (MSCI ACWI)除く日本(日興AM)	0.60	0.09	-	-	-	1.85	20.59	-	-	-	-	-	7.90	-	-	-	12.95	-	-	-	31	38	0.32	外国株式・ 世界型(除く日本)	MSCI ACWI ex Japan指数(円換算)
VT	Vanguard・トータル・ワールド・ストックETF	0.47	3.40	10.61	5.85	-	1.73	24.58	18.81	7.93	-	-	-	9.34	78.08	98.15	-	13.12	106.85	166.45	-	4,690	5,811	0.17	外国株式・世界型	FTSE グローバル・オールキャップ指数
IOO	iShares® グローバル 100 ETF	1.79	1.63	9.54	4.62	5.03	3.07	22.44	17.65	6.68	6.08	21.46	16.84	8.08	72.41	87.38	75.96	12.97	103.44	157.40	211.15	1,761	2,182	0.40	外国株式・世界型	S&P グローバル 100 指数
TOK	iShares® MSCI コクサイ ETF	1.93	4.80	12.36	6.54	-	3.21	26.26	20.69	8.64	-	-	-	10.24	85.88	108.23	-	13.23	111.53	174.91	-	354	439	0.25	外国株式・世界型	MSCI KOKUSAI(コクサイ)指数
EFA	iShares® MSCI EAFE ETF	2.08	-0.41	7.89	2.68	4.92	3.35	19.99	15.88	4.70	5.98	23.40	19.38	10.08	67.15	79.80	65.63	13.21	100.29	151.04	198.75	61,428	76,106	0.33	外国株式・ 大型ブレンド型	MSCI EAFE 指数
VSS	Vanguard・FTSE・オールワールド (除く米国)スモールキャップETF	-2.60	-5.56	6.74	-	-	-1.38	13.78	14.65	-	-	-	-	6.32	56.34	-	-	12.76	93.80	-	-	2,625	3,252	0.19	外国株式・ 中・小型ブレンド型	FTSEグローバル・ スモールキャップ(除く米国)指数
VTI	Vanguard・トータル・ストック・マーケットETF	1.63	11.13	16.36	10.18	8.07	2.91	33.89	24.98	12.34	9.16	21.97	16.61	12.16	106.38	138.55	129.51	13.46	123.83	200.38	275.41	56,847	70,431	0.05	米国株式・ 大型ブレンド型	CRSP USTータル・マーケット指数
VB	Vanguard・スモールキャップETF	-0.29	10.38	16.46	11.31	8.80	0.96	32.98	25.09	13.50	9.89	26.57	21.49	11.74	103.86	144.06	138.76	13.41	122.32	205.01	286.51	11,820	14,644	0.09	米国株式・ 小型ブレンド型	CRSP USスモールキャップ指数
EEM	iShares® MSCI エマージング・ マーケット ETF	-7.16	-14.10	-0.15	-0.22	5.68	-5.99	3.50	7.25	1.74	6.74	29.01	25.56	-2.96	26.80	38.50	35.67	11.65	76.08	116.34	162.80	24,618	30,500	0.68	外国株式・ 新興国型(複数国)	MSCI エマージング・マーケット指数
VVO	Vanguard・FTSE・ エマージング・マーケットETF	-6.77	-10.35	0.89	0.64	6.49	-5.60	8.01	8.37	2.62	7.56	29.92	26.54	-1.22	32.02	46.28	43.61	11.85	79.21	122.88	172.33	44,437	55,055	0.15	外国株式・ 新興国型(複数国)	FTSEエマージング指数
FM	iShares® MSCI フロンティア 100 ETF	-2.99	-17.23	-	-	-	-1.77	-0.28	-	-	-	-	-	-2.77	-	-	-	11.67	-	-	-	570	706	0.79	外国株式・ 新興国型(複数国)	MSCI フロンティア・マーケット 100 指数
IGOV	iShares® 世界国債(除く米国)ETF	0.17	-12.55	-0.24	-	-	1.42	5.37	7.16	-	-	-	-	0.94	26.52	-	-	12.11	75.91	-	-	451	559	0.35	外国債券・世界型	S&Pシティグループ・ インターナショナル・ トレジャリー・ボンド指数(除く米国)
AGG	iShares®・コア 米国総合債券市場 ETF	0.70	2.82	3.15	4.56	4.44	1.96	23.88	10.79	6.62	5.49	9.30	3.46	7.95	46.18	52.24	54.26	12.95	87.71	127.88	185.12	25,691	31,829	0.08	米国債券・ 中長期型	パークレイズ米国総合指数
TIP	iShares® ・米国物価連動国債 ETF	0.17	-1.71	3.16	3.47	4.23	1.42	18.41	10.80	5.51	5.28	9.96	6.61	6.29	39.24	47.00	49.21	12.75	83.54	123.48	179.05	13,950	17,283	0.20	米国債券・ インフレヘッジ型	パークレイズ米国TIPS指数(シリーズL)
RWX	SPDR ダウ ジョーンズ インターナショナル リアル エステート ETF	1.33	-1.42	9.90	3.96	-	2.59	18.77	18.05	6.00	-	-	-	6.87	66.78	90.53	-	12.82	100.07	160.05	-	5,157	6,389	0.59	海外不動産 (除く米国)セクター型	ダウ・ジョーンズ・ グローバル(除く米国)セレクト・ リアル・エステート・セキュリティーズ指数
IYR	iShares®・米国不動産 ETF	4.75	8.19	11.82	7.17	5.32	6.06	30.34	20.11	9.28	6.38	29.60	26.84	8.91	79.20	117.05	100.52	13.07	107.52	182.32	240.63	4,409	5,462	0.45	米国不動産 セクター型	ダウ・ジョーンズ米国不動産指数
GSG	iShares® S&P GSCI コモディティ・ インデックス・トラスト	-14.35	-43.29	-9.26	-16.62	-	-13.28	-31.68	-2.53	-14.98	-	-	-	-17.90	-20.55	-21.25	-	9.85	47.67	66.15	-	742	919	0.73	コモディティ・総合	S&P GSCI商品指数
GLD	SPDR®ゴールド・シェア	-6.23	-14.88	-1.63	2.19	9.42	-5.06	2.55	5.66	4.20	10.52	21.37	21.53	-2.94	3.61	15.07	34.13	11.65	62.17	96.66	160.96	23,747	29,421	0.40	コモディティ・貴金属	金地金価格 (ロンドン午後決め値)

*積み立ては税引き前分配金再投資、計算月数分を運用したものとします。例えば1年の場合は2014年7月末に1万円で積み立てを開始し、2015年6月末投資分までの2015年7月末における運用成果とする(2015年7月の積み立て額は入れない)。
 出所: MorningstarDirect のデータを用いてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンが作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール(<https://www.matonavijp/inquiry>)にてお気軽にご送信ください。